
魔法戦記リリカルなのは the LAST BATTLE

エクセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのは the LAST BATTLE

【Zコード】

Z5010Z

【作者名】

エクセル

【あらすじ】

六課が別世界に行っている間、ミッドは大きく変わった
独裁、略奪、統括
2年・・・これだけの期間でこれだけ変わった
だが、彼らが帰ってきた

大きな絆と共に

ひとり語り

地獄の炎が揺れ動く
ただ、罪人を燃やす炎
これは罪を洗い流してくれるのだろうか
わからない

この体に眠る一つの魂
それは二つの顔を持つ
一つ、優しき強い顔
二つ、残酷で非情な顔
だが本人たちわからない
まだ、目覚めてはいいから
近々、仲間の中で血が流れるだろう
裏切りという名のもとに・・・
人よ、疑うことをするのだ
さもなくば、負けるだけ
お前たちの惨敗だ
さあ今、扉が開く

魔法戦記リリカルなのは the LAST BATTLE
始まります

プロローグ（前書き）

—ニッシュルダ 拘置所—

「ほらひつと歩け！…」

監守がゆつくり歩いていた男を蹴り飛ばした。

？？？「イラつく野郎だぜ…」

蹴り飛ばされた男は愚痴を言いながら、新しい牢獄に入る。彼の名前はヴァイス・グラント。元陸戦魔導士にしてヘリパイロット、特務六課所属だった

ヴァイス「けつ、ヒゲ剃つただけでこの扱いかよ」

ヴァイスはベットに寝転がる。

？？？「本当にひどい扱いだ。」

ヴァイス「なんだ…お前さんもここにいたのかい」

？？？「姉妹の中で、リーダーたる私は2年前からここにいる

向かい側の牢獄には眼帯をした銀髪の少女は窓から空を見上げた。
綺麗とは言わない夜空

彼女の名前はチンク・ナカジマ
ナカジマ姉妹の中では次女

他の牢獄にも何人か入つていて、全員疲れ切つた顔だった

チング「父上と姉上、他の姉妹たちは無事だろ?」

ヴァイス「ノーヴェとウエンディは第2拘置所らしいぜ。ナカジマのおやじさんとギンガはわからんが」

チング「そつか……エクセルたちはどうしているだろ?」

ヴァイス「この2年間……なにもないんじゃ捕まつたと考えていいかと思うが、シグナム姉さんなら捕まりやしないだろ?」

プロローグ

2年前、ミッドチルダにてエンペラー派によるクーデターにより秩序は崩壊し平和は終わった

ミッドチルダ地上部隊と空戦部隊はエンペラー派により洗脳され、時空管理局はミッドチルダから完全撤退した

戦争となつた世界

管理世界の一部がエンペラー側に加わり、エンペラーは勢力を拡大させていきミッドチルダを支配

独裁制を敷き、1つの国を築き上げたのだ

司令を失つた特務六課と聖王教会、その六課隊員と騎士団は次々に捕まり、全員捕虜となつてしまつた

市街地放送『明日夜、中央公園にて聖王教会リーダーを公開処刑を決行すると政府から発表がありました』

市街地のスクリーンにニュースが流れた。市街地は弱肉強食ともいえる日常

飢え死にする人は最近、その数を増していた

????「公開処刑…みんなに報告しましょう」

????「そうだな、作戦決行とほぼ同時にこちらも動こう」

スクリーンを見ていた二人の男女は裏路地へ入つていった

—地下街—

？？？「それぞれの位置は確認した。ライオットとアグレッサーに伝言を頼む…処刑場にはエンジェルが行く、と」

背を向けあつた男女は何かを話し、直ぐ離れていった。

—翌日—

夜、公開処刑場には色々な人たちが集まつていた

メディア関係、政府関連

市民たちが野次馬として集まつていた

処刑人となる人物、聖王教会リーダー騎士カリムは小さな処刑台に登つた

剣による斬殺という古く酷く惨い処刑方法だ

政府要人「騎士カリム、この2年よく耐えたものだ。頼みの騎士の女もいない騎士団もいない…お前にはもう何も残つてはいない」

カリム「まだ…残つています」

野次馬の中をフードとマントで全体を隠した人物が歩きはじめる

カリム「いざれ…あなた達は思い知るでしょう…私たちにはまだ希望があります」

カリムは横目で相手を睨んだ。

政府要人「ああ～キミの知り合いの八神はやてのことかな？残念だが、彼女の率いる主力のほとんどが消え失せ、残る部隊の奴らも全員捕まつた。どんな奇跡が起きても、現れはしないのだよ～時間だ！執行せよ～～！」

要人が離れていき、刀を持った男がカリムの左隣に立つ。手錠が付いた手を胸の前に上げ、祈るように目を閉じた。男は刀を構え、カリムに狙いをつける

カリム「…………？」

カリムは不思議な感覚を感じた。覚悟を決めたのに一向に斬られない目を開けると、刀を持った男が刀を上げたまま静止していたのだ。

ドサッ…

そして男はそのまま横へ倒した。周りが騒めき始めた

？？？「残虐な者、それは古くから消えることない」

いつの間にか自分の隣にフードとマントで全体を隠した人が立つていた

カリム「あ～、あなたは…？」

死刑台に魔導士たちが6人ほど集まってきた

政府要人「何者だ貴様！！」

死刑台に先ほどの要人が上がってきた。

？？？「…………2年、2年でここはこんなにも荒れ果てたんだな」

政府要人「なに……」

？？？「俺達がいない間…仲間はこんな扱いにされていたとは」

カリムはフードの中を覗いた。

カリム「…あなたはッ…！」

政府要人「取り押さえろ！！」

1人の陸戦魔導士が槍を持つて斬り掛かってくる
それを軽々と片手で弾き、魔導士を蹴り飛ばす。そいつはフードと
マントを横に投げた

政府要人「きつ、貴様は！」

？？？「そう…2年前、お前たちが存在を消した部隊…時空管理局
特務六課、エクセル・アーシュライト…俺達は帰つて来た！！」

エクセルは剣を抜き魔導士たちと戦闘を始めた。魔導士の1人が慌
てて要人に走つてくる

魔導士「報告します！！各地の拘置所が何者かによつて襲撃を受け
ています！！」

政府要人「なに！？…ま、まさか――」

魔導士「全て、六課と教会騎士団を拘留している場所です――」

要人はエクセルを見た。

複数の魔導士たちと軽々とわたりあい、『から』を見てニヤリと笑った

「第1拘置所」

ソラ「『から』ソラ、第2区画の敵制圧完了、次に向かいます――！」

2つの銃剣ニルヴァーナを持つたソラは通信を終えて、次の場所に向かう

ドゥーエ「まったく…終わつたら次に行くのは構わないけど、ついてく人の身にもなりなさいよ」

右手に装備した爪で牢屋の壊したドゥーエは入れられていた仲間達を救出する

「ドゥーエ「ああ、脱出よ――」

— 第2拘置所 —

エリオ「スピーアングリフ…」

「ぎゃあああああ！」

「サッ！」

監守をストラーダで斬り飛ばしたエリオは牢屋に入っていた仲間を救出する

ノーヴェ「エリオ！？お、お前、無事だつたんだな…！」

エリオ「当然です…！」

エリオはノーヴェにデバイスを渡す

ノーヴェ「結局前のデバイスになつちまつたがまた力を儲つるぜ相棒…ジエットエッジ…！」

ノーヴェはバリアジャケットを装着する。

ノーヴェ「ウエンティのバカを出せなきやな…！」

エリオ「心配無用です。キャロがそれ助けたそりですから」

他の仲間も牢屋から救出するエリオ。

ノーヴェ「オーケーーなら、憂を晴らしだ。向かつてぐる敵を打つ
端からぶつ瀆す！！」

—第6拘置所—

シグナム「監守がこの程度か…抜くまでもない」

ヴァイス「シグナム姉さん！？」

アギト「今出してやるよーー！」

アギトは牢屋を次々と開けていく。中から続々と仲間達が出てくる
シグナム「お前たちの武器だ。私一人では他の場所までは手が回ら
ん…手伝え」

ヴァイスとチングにそれぞれの武器を渡す

チング「すまない…エクスカリバーは折れてしまった」

シグナム「気にするな。」

ヴァイス「うし、ストームレイダーはまだ生きてるな。チング、お
前さんは他の場所を頼んだぜ！！」

チング「了解した。5分で終わらせよう」

—第4拘置所—

スバル「ジユウトリボルバーーー！」

いくつもの壁を一撃で打ち抜いたスバル。その凶暴にいた仲間達は目を疑う

ギンガ「スバル！？まさか、本当にーーー？」

スバル「ギン姉、助けに来たよーーー！」

ゲンヤ「このバカ娘が！今までどこのこじやがつた！！！」

そこにティアナが駆けつけ、鍵を開ける

ティアナ「話は後です！まずは脱出ですーーー！」

仲間達を乗せたヘリが次々と飛び立つていく

「逃がすか…脱獄するなら死んでもいいわ！」

監守長がライフル型のデバイスを構え、ヘリに狙いをつける。トリ

ガードを引こうとした瞬間、雷鳴が走りヘリの横に金髪の女性が現れ物凄い速さで飛んできた

「なつ……ど、どこから……？」

バルティッシュ『ジェットザンバー』

持っていた金色の刃が伸び、監守長の足元をえぐり吹き飛ばした

フェイト「こちらライオット、救出と脱出に成功…帰還しますー。」

エクセル「了解……それじゃ…退散をさせてもらひます…！」

政府要人「逃がすと思うか…！」

カリムを抱えるエクセル。

すると周りの装置が動き始める。

政府要人「この強力なAMF空間の中で飛ぶこともできまい…！」

エクセル「…………カリム、しつかり捕まつて」

カリム「え？…はつ、はい」

陸戦魔導士の部隊が続々と集まつてくる。

エクセル「操られるとはいって、数が増えると厄介だが…今の俺にはAMFなんて無意味だ」

すると、エクセルの体が宙を飛んだ。

政府要人「なつ、なんだあれは！？」

抱えられているカリムはエクセルの背中にあるものを見る

カリム「はっ、羽根…！？」

いや…翼だ。

人にはない白銀の翼を広げ、エクセルは空へ舞い上がった。

舞い上がりしていく相手を見て要人は隣にいた魔導士の胸ぐらを掴んだ

政府要人「なんとしても奴らを捕まえろ！！」こんなことが上に知られては私一人の責任だけではすまん…！貴様等も同罪だ…！」

カリム「あの…その…エクセルさん。」

エクセル「ん…？」

カリム「その翼… 一体あなたは」

エクセル「俺は天使… 翼があつて当然です」

カリム「てつ、 天使…？」

するとエクセルは高度を上げて、雲を抜ける

エクセル「細かいことはまた後で… 追つ手が来た」

スピードを上げる。その後ろから空戦魔導士の2編隊が飛んでくる
エクセル「はやて！ 敵の追つ手が迫つてゐる。アグレッサー1に援護
射撃を要請…！」

横に通信画面が表示され、部隊長のはやてが映しだされた

はやて 了解や… そちらの位置は把握済み、あと30秒で船が視認
範囲に入るはずや…！

カリム「はやて… 良かった」

はやてを見て胸を撫で下ろすカリム

はやて カリム、再開を喜ぶのは後や。

エクセル「ヴォルフラム確認… ちょっと手荒になりますけど、我慢
してください…！」

カリム「え…」

エクセルはソニックムーブを使用し、船へ急接近する

エクセル「受け取れ…！」

エクセルはカリムを飛びながら船へ放る。カリムは小さな悲鳴を上げて、甲板へ下りていく

甲板上にはバリアジャケットを装着したはやてが立っていた。どうやらエクセルは、はやてに向けて放つたらしい

はやて「よ…と…」

カリムを上手く受けとめたはやて。

カリム「はやて！？」

はやて「アグレッサー1、援護射撃開始や…！」

そして少し離れた甲板には、なのはが立っていた。左腕には最新型の装備を装着していた

なのは「了解！アグレッサー1、ストライクカノン スタンバイ！」

「！」

ストライクカノン。対AMF戦用特殊装備であり砲身、または近接戦闘にも使用できる

撃ちだすのは魔力エネルギー弾で、出力兵器扱いにもされる。だが、戦闘にも使用できる

今の状態のミッドチルダでは魔法を使うのは不利になつたある
その為にプレシアが作り上げた武器である

エクセル「今のこの世界では存在しない物を作り上げる。対抗する
にはそれしかない」

エクセルは方向転換し、空戦魔導士隊に突っ込んだ。

なのは「ストライクカノン、撃ちます！！」

なのははトリガーを引いた。

ドオン！ドオン！

エネルギー弾は拡散し、エクセルを援護する。

エクセル「傷つかないように峰打ちにしてやるよ！..」

エクセルは自分のデバイスのブランド・ティータを抜き、逆刃で魔
導士と交戦する

ー？？？ー

？？？「奴らの動きを良く記録しておけ」

バイザーを付け、灰色のスースを身につけた翠色の短髪の青年はオペレーターに指示する

オペレーター「了解」

？？？「にしても面白い。どうやらいなくなつた時間帯で力をつけてきたとは」

青年は画面に映つてゐるエクセルを見て、舌で唇を舐める。

？？？「美味そうな男だ。フフフフッ…」

エクセル「全滅確認、帰還する」

ヴォルフラムは上昇していき、エクセルは甲板に降り急いで中へ入る。ブリッジでは、はやてが指示を出していた

はやて「衛星軌道に入つたら、時空間に突入や！！」

そして、捕まえた捕虜たちを全て奪還され
あまつさえ、空戦魔導士隊の2つを落された責任を処刑場にいた要
人が全体責任となつた

政府要人「お待ち下さい閣下！…どうかお許しを―――」

？？？「断罪」

男が言うと突然、要人の首が飛んだ。

ドサッ

胴体は床に倒れ、血が溢れだした。

？？？「片付けておけ」

？？？「はつ…」

黄緑の髪を生やした青年は胴体と首を引きづり、部屋を出でていった

？？？「奴らが帰つて來たか…フフフッ…よからう。このエンペラ
ー…逃げも隠れもしない。開戦だ！…！」

第1話 バトル開始

本局に帰還したヴォルフラム。救出した人たちに歓喜が溢れた。

シャーリー「フェイトさーーーン！！」

シャーリーは泣きながらフェイトに抱きついた。2年の間慕つていた人がいなくなり、さぞ淋しかつただろう。スバルの場合はその逆、姉妹や父親と会いたいという気持ちだった。家族愛が強いスバルらしい

スバル「ギン姉ーーーッ！！」

泣きながらギンガに抱きついたスバル。

ギンガ「もうスバルつたら、泣きたいのは…こっちょ

ギンガも涙目でスバルを抱き締めた。

ディードがこちらを見るが、頭を下げるだけで他の姉妹たちの所へ行つた

エクセル「意外だな…あいつが来ないなんて」

と俺の前をヴィヴィオが通り過ぎた。ヴィヴィオがこちらに気づき

ヴィヴィオ「エクセルさん……やつぱり…イクスはいないです」

エクセル「あつ……他の人には聞いたのか？」

ヴィヴィオはある女の子を探していた。同じ繋がりを持つ大切な友達だ

ヴィヴィオ「聞いたのですが…そんな子知らないって」

エクセル「そう深く思い込むな。たまたまここにいないだけかもしれない」

ヴィヴィオ「……そうですよね。すみませんエクセルさん…ちょっと顔を洗ってきます」

明るく笑ったヴィヴィオは走っていった。

その夜、ひとまず眠ることにした俺はベッドへ横になっていた。ちなみに言つと相部屋である

フェイト「スツ…スツ…」

隣のベッドではフェイトが小さな寝音をたてていた。俺は目が覚めて、部屋の中についたシャワールームに向かった

エクセル「ハア…」

シャワーを浴びながら、ため息をついた。

エクセル「こっちに戻ってきて1ヶ月……体はまだ保つか」

俺はこっちに戻ってきて直ぐ身体チェックをした
向こうの世界で血を吐き、体は何度も傷ついた

それが不安でしょがなかつた。何度も無理な能力の強行、無理な
力の発現
その重なる負担が体を締め付けた。

エクセル「ツ！？」「ホツ、ゴホツ……！」

口を手で隠した。血が手のひらに付着する
吐血が日に日に増してくる。愛人のフェイトも含め、主要メンバー
にはとても話せない

エクセル「余命が一年ちょっとなんてな……1年で全てを終わらせ
る。無理な話だ」

1年は絶対あり得ない

俺の命はもつとはやく死せるだらう

エクセル「俺の考えに賛同なんていらない……世界を復元するため
に俺はこっちに戻ってきたんだ」

あの帰還の転移……等価交換という代償として全ての能力に制限をか
け、世界を復元する力を得た。

エクセル「天に益します父よ……俺はバカです。こんなことで喜ぶ者
はいないというのに」

ホールに集まり救出したメンバーに向こうの出来事をレポートでまとめて配った。チラッと見ただけでもかなり細かく書かれていた読むのが速い人は俺を見て驚いている。それもそうだ…納得なんて出来るのが難しい

はやて「理解するのは後回し……今のウチらは危機的状況や。正直なところミッドに行くのも容易やない…10人行って、全員戻つて来れるのかもわからん」

全員が揃つ中、真剣な眼差しではやはメンバーを見据えていた。あの田は問つ田だ。

はやて「こんなこと本当は言いたくはないんやけど……抜けたい人は抜けてええで」

ザワザワ…

全員が騒ぎ始めた。

はやてに怒号や文句を言つ者いたり、何故かと聞く者もいる。

エクセル「はやての言つ」とは正しい

俺はいつの間にかはやての隣に立つていた
ざわめきが緩んだ

エクセル「この先にあるのは死ぬか生きるかだ。彼女はお前たちの死ぬところを見たくないから聞いている……もつあまい考えは通じない。俺達は後戻りが出来ないとここまで来ている！覚悟のある奴は残ればいい、それがない奴は行けばいい。咎めはしない……それが自分の選択したものだ」

はやて「最後のチャンスと思って……私が後ろ向いている間、行きたい人は行って」

そう言つて、はやては背を向けた

なのはとフロイトはそんなはやてを見ていた。情けないと思つているに違いない

部隊長である彼女が「逃げていい」なんて言つてているんだ

エクセル「…………どうやら、誰も行かないみたいだ」

はやて「え……？」

はやては振り返つた。

そこには決意の気持ちでいるメンバーだ

誰も出ていく考えはない。

ギンガ「部隊長、私たち全員はミッドを守りきれなかつたんです。ミッドを取り戻すこと、命をかける覚悟という決意は、最初から私たちはあります。いえ……聞かれるまでありません！！」

「そうだそうだ！！」

「俺達は八神部隊長について行くぜーーー！」

「大好きなミッドチルダを取り戻したいの！！」

全員から激励と決意を聞いたはやで。

はやて「・・・ならみんなの命、この私が預かる…必ずミッドチルダを…絶対に取り戻すんや…！」

全員から熱意の声が上がった。

ヴァイス「よっしゃ野郎共！早速船のメンテに回るぞ…！」

「おおおお――――！」

ヴァイス、アルトを含む作業隊員たちがホールを勢いよく出ていった。

他にも自分の持ち場に向けて走っていくメンバーがいた。

はやて「さて…じゃあ主要メンバーはブリーフィングルームに行つて会議や…！」

「ブリーフィングルーム」

シャーリー「現在ミッドチルダは、首都を拠点に要塞都市と化し住宅街を含めた地域には駐屯地、対地空迎撃のシステムが存在します。直接叩くには状況が不利です」

シャーリーがミッドチルダの説明をモニターで行つた。

対地空のシステムはどうやら発展改良したガジェットシリーズ、強力なAMFを広範囲に展開するシステムもあるようだ
さらに駐屯地には、手馴れの部隊を配置している

はやて「鉄壁の街になつたもんやな。侵入するのも大変やつたのに」

シグナム「他の場所からにしても無理か。シャーリー、他の世界の状況は？」

シャーリーはパットを操作し、侵略された世界のランクを表示する
シャーリー「現在は管理世界の半分を支配下に置かれ、ここ最近は無人の管理外世界もいくつか」

ヴィータ「無人世界？そんな場所が何の役に立つんだ」

シャーリー「どうやら駐屯地兼実験施設を置いているらしいんです」

シャーリーはその写真を表示する。いくつもの駐屯地の中に紛れて、施設とも言つべき場所がある

フェイト「なんの実験施設か分からぬ？」

シャーリー「残念ながら分からぬんです。本局の人たちが調査に向かうも侵入が困難としか」

エクセル「侵入が困難…ね」

それほど警戒してゐるなら、大事な施設なんだろうな

はやて「リイン、今使える船は...?」

リイン「武装の改良が行われているヴォルフラムを除いて、エクセルさんのプロメテウスだけです」

はやては写真を見て考え込んだ。

エクセル「施設の調査なら俺が行つてくる。侵入するのは容易いレベルだ」

はやて「確かにエクセルくんなら容易いかもな。でも、一人じゃ心配や」

なのは「なら、私が一緒に行くよ。もしもの時に支援が必要だろ」

なのはが言つているのは正しい。だが、はやて、フロイト、なのはといつ六課の三柱の一人を連れて行くのはさすがにマズいエクセル「いや、なのはが行くと六課の方が厳しい...行くのに最適なメンバーがいるじゃないか。なあ、なのは」

なのは「え...? もしかして、あの子たちを連れていくの?」

訓練場でストライクカノンを持った星光はヘッドセットで起動を報告する

星光「ストライクカノン、起動正常… エネルギーバイパス問題なし。魔力と連動確認終了です」

プレシア「了解。サイズと使い方は問題なそうね… 次、お願い

少し離れた場所で雷刃は自分の愛機であるバルディッシュュに似たデバイスを改良した次世代型を持つた

これはフェイトのバルディッシュュと同じように改良されライオットザンバー？として生まれ変わっている

雷刃「ザンバー02、全て問題なし… 魔力運用も正常… これでいいの？」

プレシア「大丈夫よ。2人共お疲れ様、休憩に入りなさい

訓練場を出て、飲み物を片手に雑談している2人

雷刃「こつち来てから検査と実験続き… 疲れるし、飽きるし、ストレスたまるよ～」

隣にいる星光は自分の魔力数値を眺めながら、雷刃の話を聞いている

星光「そうですね」

雷刃「おまけにあんな重たい物に変えられて辛いと思わないシユテル…？」

星光「そうですね」

星光はただ「そうですね」と返すだけで、雷刃はため息をついた

？？？「なあ～にをため息をついておるのだ」

？？？「ハイハイ、その2人！！」

星光と雷刃に話し掛けたのは、自分たちと同じ閻統べる王となのはとフェイトとはやての友達のアリサ・バニングスと月村すずかだ。2人は2年前にちょっとしたことに巻き込まれ、入局してから2年間も管理局から出られなくなってしまっていた
さすがに六課隊長陣の友人をそのまま返すのは危ないと判断したクロノ提督の考えだ

六課の主要メンバーが消えてから、新人しかいなかつたプロメテウスを管理局まで守り届けたのはこの2人の判断があつたからである

アリサ「文句言つてないで支度しなさい。出動よ！！」

閻王「3人揃つての出撃だ。レヴィよ、暴れられるかもしねいぞ？」

雷刃「ホント、王様！！」

雷刃の顔がパツと明るくなつた

星光「……なにかあつたのですか？」

すずか「なんでも管理外世界に行くらしよ。プロメテウスに3人

を連れて来てほし「って」

雷刃「やつたー出でられるーー！」

喜ぶ雷刃にアリサはチョップを食らわす。

雷刃「痛いッ！」

頭を抑えた雷刃。

ピンポイントで頭のてっぺんに当たったのだ

アリサ「遊びに行くんじゃないんだからーしつかりしなさいよーー！」

雷刃「はあーい」

2人をおいて先に歩いていたすずかと星光と闇王

すずか「数人編成で、移動が出来ないのはちやんとフロイトちゃんの代わりにシユテルちゃんとレビちゃん、ロードちゃんが必要なの。緊急時の後方支援とか言つてたよ」

星光「エクセルさんの〇〇（ダブルオー）はまだ調整が済んでいいのでは？」

すずか「そうらしいね。」

〇〇（ダブルオー）とはエクセル専用の新装備。対AMF兵器の中でも特に力を入れている物だ

星光「エクセルさんが言つにはストライクカノンも含めた物は本来

ACEC兵器といつりしこですが…歴史に関する物だからでしょうか
すすか「うーん…私に聞かれてもわからないけど、そのいつり呼ぶん
じゃないかな」

闇王「あやつも中々の策士なのだがな」

プロメテウスが管理局から離れて行く

ブリッジではエクセルがパットを操作していた。天使であるエクセルだけが使えるパットだ

エクセル「ジャミング作動…最大船速で次元移動する。武装員はACEC兵器装備で待機」

乗っているのはエクセル、ソラ、ドゥーハ、星光、雷刃、闇王だ。

「了解…！」

エクセル「今からだと一時間弱か…」

—1時間後—

エクセル「今回の目的は偵察と施設内部の調査だ。危険な任務だから、帰るのは容易じゃない……」

次元空間で停止しているプロメテウス。他の4人に説明しているエクセル

エクセル「行くのは俺とソラとドゥーエだ。プロメテウスは現状のまま待機し信号を受信したら転送してくれ」

アリサ「了解了解。気をつけて行つてきなさいよ」

すずか「ちゃんと戻つてきて下さこよ。みんなを悲しませない為に

転送装置の前で星光、雷刃、闇王に説明する

星光「信号を受信したら援護に行きます」

雷刃「ちゃんと帰つてきてね」

闇王「出来るだけ隠密にするのだぞ塵芥！」

施設と駐屯地の外れの森に転送した3人は直ぐに移動する。ジャミングしてあるとはいえ見回りはいるからだ

エクセル「さて、通信手段の再確認だ。インカムですること」と、念話はできるだけ禁止。ドゥーエは駐屯地、俺とソラは施設に侵入する

ソラ「はい、わかりました」

ドゥーエ「しつ、見回りよ」

移動するのを止め、林に伏せ道の先から来る3人の敵を見る。実弾のマシンガンを持った兵士だ
装備しているのは防御対策が完全な物だ

エクセル「打撃で倒せる自信はないな……殺すか」

ソラ「……やるんですか？」

エクセル「殺すしかないだろ」

ブランド・ティータを抜く。

ドゥーエ「待つて……私が行くわ」

ソラ「なにか考えがあるのか……？」

ドゥーエ「こじめかみに指を当てる

ドゥーエ「こじこを使いなさいよ……」

ドゥーエは青いナンバーズの密着スーツを着て見回りの後ろまで回る。林から出て見回りの3人に声をかける

ドゥーエ「あ～い」

「ん? なんだお前、どこから来た!」

3人の内の2人がマシンガンを向ける。

ドゥーエ「本部から貴方たちに宛てにお届け… も・の・よ」

ドゥーエが見回りの一人に近づき、胸元を強調しながら腕を掴む

「そつ、そつか…お前が届けか…ふつ、フフフフフ」

林の近くでドゥーエを座らせる。

ドゥーエ「私つて意外とすごいのよ。こんな密着のスーツ着てるけど実は――――」

「実は…?」

3人はドゥーエの横にマシンガンを地面に置く。

ドゥーエ「危ない……女なのよね!」

マシンガンを素早く取り、マシンガンの端で一人の腹を叩きつけ気絶させもう一人には蹴りを喰らわせ腹を叩き氣絶させる

「おひ、お前……？」

ドゥーハ「おつと……」

マシンガンの銃口を最後の一人に向ける。

ドゥーハ「動かないで……」

林から出てきたエクセルとソラ。

エクセル「やるなドゥーハ……」

倒れた一人を引きづり林に戻る。

ドゥーハ「なんのなんの もともとこいつ風な仕事だつたから楽勝よ」

マシンガンを向けながら、相手の懐などを探し地面に放る。

ドゥーハ「はい、おやすみなさい……」

ガツンと最後の一人の腹にマシンガンを叩きつけ氣絶させた

氣絶させた見回りを林の奥にバインドで縛り付けた。3人の内、2人の服と装備を脱がしエクセルとソラはそれを着込み真っ赤なゴーグルとヘルメットとガスマスクに似た物をつける。酸素濃度など、色々なことがわかる高性能のゴーグルだ

エクセル「よし……ドゥーハ、ここからは別行動だ。」

ドゥーハ「ア解。では姿を変えて侵入します」

マシンガンを持った俺とソラ。重みを少し感じた

ピピピッ！

サジタリウス01、応答願います。サジタリウス01、応答願います

エクセル「ん……？」

片方の耳についた小型通信機から聴こえてきた。女性の声だ

エクセル「…………」ちりサジタリウス01」

新しい任務を伝える、実験施設の見回り任務だ。現任務を中断し、新しい部所へ出頭せよ

エクセル「ア解！ただちに向かいます」

俺は通信を切った。

エクセル「ラッキーだな。行くぞソラ

ソラ「了解」

顔を隠しているためバレる必要はないが、いくつか心配事もある

エクセル 奴らになりきれよ。妙な動きをしたら怪しまれる

施設内の部所へ出頭し、見回るため施設内を観察しながら廊下を歩く

ソラ 何の実験なんでしょう

エクセル いくつか部品が見えるな…兵器工場か？

ドアが開き、2人は中へ入る。部屋の中は水槽だらけだった

エクセル「なんだこれは…」

歩きながら水槽の中を眺める。中には何もなかつた

ソラ「父さん…」コンソールがあります

ソラが部屋の奥にあつたコンソールを見つけた。俺はコンソールを見て、自分のパットを出し接続する

エクセル「データをコピーする。」

パットのコンソールを操作し、データのコピーを開始する

エクセル「ドゥーハ、そつぞうだ？」

ドゥーハ 駐屯地には改良されたガジェットがいくつかあつたけど、対して変わった感じはないわ

ソラは水槽の間を通りながら、中を確認する。

エクセル「こちらは実験室らしき部屋でデータを収集中だ。いつバレるかわからないから何か動きがあつたら報告頼む」

ドウエー工了解

俺はコンソールを叩きながらロックを外していく

۱۷۰

エケセル - 楽なセキエリテイだ。ソラ、何かあつたか...?」

ンリ- しえ 特に何もなしてす」

戻ってきたソラはヘルメットとマスクを外し、汗を拭いて

「エクセル、突破した。さて、ゴローついでに中身を確認だ。」
「は、人体改造実験？」

データの中身を確認しながらコンソールを叩き続ける。

ソラ「人体を改造してどうしようと…」

エクセル「わからんな。もつと探らないと……これはリストか」

被験者とも言える人たちのリストが表示される。かなりのリストが存在していく

エクセル「この規模の施設からして、一番古いのだと……一年前から記録か」

ソラ「-----」

エクセル「ソラ、ドゥーハに連絡を頼む。30分後に北の道で合流と伝える」

ソラ「-----」

返事がなかつた。

俺はソラへ振り返つた

エクセル「ソラ、返事は…」

ソラ「え？…はつ、はい」

ソラは耳の通信機に手を当てドゥーハに連絡する。

エクセル「さて…完了したか」

パットを閉じ、画面を消す。

「被験体027の状態に変化は…」

「また失敗ですよ。血液が全身から吹き出しまして」

後ろから人の声が聞こえてきた。

エクセル「マズい、隠れろ…」

俺とソラは水槽の間に入り、影に姿を隠す。

「今度はまた別のサンプルか…」

研究者たちが集まってきた。

ソラ「数が多くて入り口まで行くには難しいです」

小声で話す俺とソラ。

エクセル「仕方ない何か手を考えな————」

俺はソラが隠れていた水槽の中が見えててしまった。

エクセル「な……んだと……」

中のものを見て、俺は血の気がひいてしまった。

ソラ「父さん…？」

ソラは気付いていないようだ。いや、気づかないのがおかしいと思ってしまう

エクセル「ツ…！…」

俺は水槽の影から飛び出し、研究者たちへマシンガンを向けた。

「な…！…」

研究者たちが動搖した。

エクセル「貴様ら……なぜあいつがここにいる……」

「……ツ！？」

エクセル「存在するはずがない……あいつが存在するはずがない……！」

俺は研究者の一人に銃口を突き付けた

エクセル「答える……！」

その瞬間、警報が鳴り響いた。研究者がスイッチを鳴らしたようだ

エクセル「ちつ……！」

早々と兵士たちが入ってきた。一人が銃口を向け数発発砲してきた

研究者がいたからか当たることもなく水槽に当たるだけだった。また水槽に隠れて、マシンガンの安全装置を外す

エクセル「ソラ……！」

俺はソラに合図を送る

ソラ「了解……！」

俺とソラは水槽の間からマシンガンを乱射する。
もちろん当てるつもりはないあくまで牽制だ

エクセル「撤退する……ドゥーハ、予定地点で合流だ……」

マシンガンを投げ捨て、バリアジャケットをセットアップする

エクセル「壁に穴をあける！…」

ブランド・ティータを抜き、俺は深呼吸をした。

エクセル「フレイム」

そう呟き、ブランド・ティータの刃に炎を発火させる。

エクセル「炎の唸り フレイムウェイプ 火炎連刃！！」

壁に向けて炎の連刃を放つ。燃えながら放たれた刃は壁を燃やし、斬り刻み穴を開ける

エクセル「行くぞソラ…！」

ソラ「了解ッ！」

マシンガンを捨て、ソラは2つのうち一つのニルヴァーナを構え2人で廊下に出る。施設内は火災のサイレンが鳴っていた。合流地点近くの曲がり角で足止めを食らった

エクセル「あと少しつてとこりうだ…俺としたことが」

ソラ「ドゥーハ、ドゥーハ…応答しない…ビ」にいるんだ…」

ドカーーーン…！

近くで爆発音が響いた。叫び声が聞こえてくる

ドゥーハ「ほらほら！死にたくなかつたら退きなさい……」

ドゥーハが重火器を持ちながら叫んだ。あれらこれらと様々な爆発が起きた

悲痛の叫びも止まない

ドゥーハ「お待たせ……」

持つている物を捨てたドゥーハ。合流した俺たちは急いでその場から離れた

ソラ「信号確認通知きました！！」

走りながらソラが報告した。

エクセル「よしー」のまま脱出だ！！

研究者の代表が本部から連絡を受けていた。

「いや、しかしあれを出されたら……」

？？？「いいではないか。奴らを始末するためだ」

「ですが制御出来る物も捕獲する物も残らず壊れてしまつていて、我々も極めて危ないのです」

？？？「ならば施設を破棄すればいい…」の意味はわかるな

「……………わかりました。」

エクセル「追つ手が来なくなつた」

背後を振り返つて、走るスピードを落とす

「な、逃げ切ります！」

ソラ「……いや、まだだ！！」

ソラが言うと林から黒い影が飛び出してきた。

?

?

?

—

—

—

—

—

—

エクセル「なにつ
⋮ !?」

相手の速さに反応しきれず、横に飛ばされ木に叩きつけられた

ソラ「父さんー！」

黒い影はそのままドゥーエも林の中へ殴り飛ばす。

「アーリー・ハーベスツ……？」

そしてソラへ襲い掛かる

ラベル...」

もう一つのニルヴァーナを剣に変え、片手のガンフォーム状態のニルヴァーナで発砲

？？？「———」

もちろん当たることもなく襲い掛かってくる。相手の出方がわからぬ中で無理に剣で受けとめるしかない

「-----！」

キンシ！！

「シーラー...」

エクセル「下がれ！！」

ブランド・ティータに水を纏わせて、相手に斬り掛かる

エクセル「水神の槍
レイザス！！」

ブランド・ティータが鋭い刃の水の槍になる。それを手に連続で突きはじめる

ヒュッシュ、ヒュッシュ、ヒュッシュ……！」

「……………？」

エクセル「おお……………ツ！」

黒い影は一発を胸に食らい、エクセルは相手をそのまま林の木に突き刺す。

「……………あつ…あま」

エクセル「…………人間……じゃないな」

ソラと林から出てきたドゥーエが歩いてきた

「…………あつ…ひひひ…逃げられる…と思つた。あい…つら…から」

相手は力尽きた。黒い影、歪な相手だった。左腕から首から上を除く全てが黒く染まつていて、薔薇に似た刻印が左腕に刻まれており何より顔の半分以上が獸だった。まるで、ヴァンデビルみたいだ

エクセル「人体改造…か」

ブランド・ティータを抜き、血を払つた。

エクセル「嫌な感じだ…」

ソラ「父さん…今直ぐ行きましょう…」

ドゥーエ「いつまた来るか分からないうわ」

エクセルは相手が携帯していた物を見た。

カートリッジもない、赤黒の大剣……サンプルとして持つていくか
エクセル「ソラ、その剣を持ってくれ……サンプルとして持つていく」

ソラ「了解！」

ソラは相手の剣を手からゆっくりと抜き、持ち上げる。

剣を背負つたソラ。

エクセル「先に行つてろ……後で追う」

ソラ「え、でも……」

エクセル「厄介な奴が来た……命令だ。早く行け、邪魔になる」

俺の冷たい言葉でソラは顔を伏せて、ドゥーエと一緒にその場を走つて行つた

ガツン……ガツン……ガツン……

エクセル「――――――」

ソラたちが走つて行つた方を向いていたエクセルは背後を振り返る。
施設方向から何か重い音が近づいてきた。

エクセル「……………まさかお前とまた戦つ」とになるとほな、
友よ」

？？？「—————」

エクセル「なんだか体をいじられたみたいだな……直ぐ終わらせて
やるよ……お前の為にもな」

—合流場所—

星光「お一人だけですか…？」

ドゥーハ「ええ…エクセルが先に行けて」

星光「そうですか。では転送を…」

その時、ソラたちの背後から爆発音が聞こえた

ソラ「あそこは…父さんがいる辺りだ…！」

ソラは走り出した。

ドゥーハ「ちよつとソラ……」

星光「私が行きます。ドゥーハセヒレヴィイ、王は先に行つてください」

星光はストライクカノンを持つて、空へ

星光「シユテルよ、無茶するでな」

闇王「わかつています王、では行つて参ります」

星光は爆発した方へ飛んでいく

ドゥーハ「まつたくビツして…」

雷刃「どうする? 行くの?」

ドゥーハ「転送してちょうつだい。先に戻らないと面倒でしょ」

闇王「うむ、では転送するぞ」

???'キサマハニガサナイ!」

爆煙が晴れて、俺は鞄に納めていたブランド・ティータに手をかける

エクセル「あの時の続きなら止めとけ…今のお前じや俺には勝てない

相手は手に持っていた一握の槍を向けてきた。

？？？「カツサ！」ノチカラデ！』

エクセル「力に溺れたか“判決の大天使”もおちたものだな、エド

目の前にいる相手は向こうの世界で突然現れた穴に呑まれたメセサリウスのボスにして俺と同じ大天使の位をもつたエドだった。先ほどの相手と同じく紋章があつて、首筋から右腕までのびていた

槍が急速に伸びた。

備は升りて机を過げて
エトは轉り挂かる

お前の心は底なしの闇に染まつたか？

ブランド・ティータを握る手が少しだけ緩んだ。

エクセル「なら…安らかに眠らせてやる」

エドにブランド・ティータを振り下ろす。

ザンツ
・
・
・

エドの胴体を斜めに斬った。斬られたエドは槍を落とし後ろに倒れる

エクセル「さらばだ…友よ」

ブランド・ティータを鞘に納め背を向けて歩き始めるが

エド「トモ…ダト?」

エクセル「―――ツ!――?」

エド「キサマハトモテハナイ!――」

ブシユ…!

エクセル「ぐつ…――!」

倒れたはずのエドが何もなかつたかのように立つていた。後ろから脇腹を縮んだ槍で刺され引き抜かれて俺は脇腹を押さえながらエドと距離をとつた。

エクセル「お前ツ…なんで…――!?」

エド「ワタシニコウゲキハムイミ――!」

そこへ飛んで駆け付けた星光がストライクカノンを構え

星光「退きなさい…――!」

バンツ…――バンツ…――!

エネルギー弾をエドに向けて連射する

エクセル「シユテルツ!援護を…ツ!…ゴホゴホツ…――!」

こんな時に余計な吐血を…！？

俺は口元を隠し血を吐く
傷の影響もあって吐きやすい。地面に両膝をついて俺は何度も咳き
込んだ

星光「エクセルさん…！？」

エド「スキラミセタナ…！？」

エクセルに気を取られ星光に向けてエドは二股の槍を投げた。

星光「しまった…！？」

ズタンツ…！

銃声と共に槍は弾かれ碎けた。

エド「ナニイツ…！…？」

ソラ「ブレイク…！」

走ってきたソラが叫び、その体が赤く煌めき瞬時にエドの懷に入り
込み剣状態の2つのニルヴァーナを構えた

ソラ「散れッ…！！

そしてソラはその速さでエドを無数に斬り、音は空を切る音のみだ
った。

ソラ「さよなら…エド」

体の輝きはなくなり、ソラは片方のニルヴァーナをガンモードに変えて、停止したエドの胴体に弾丸を撃ち込んだ。

ドンッ!!

ソラ「俺の友達…」

エドの体がバラバラに碎けた。

肉体は破片のように飛び散った

エクセル「…ソ…ラ…」「ホッ、ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ…」

立ち上がった俺はせき込みながら倒れた。

ソラ「父さん…」

—プロメテウス—

あれから気絶したエクセルの傷の手当てをして、医療室に寝かせた。

星光「傷の影響で複数の吐血…なんてありえるのですか

ドウ—エ「あ…私に聞かれてもね」

ブリッジに向かつて歩いていた2人。

星光「私の単なる推測ですが、あれは単なる吐血とは考えられません。あの人の動きはまるで前からそつであるような感じでした」

ドゥーハ「まさかそんなのありえないわよ」

星光「そつだと思いたいです」

プロメテウスは管理局に帰還した。

エクセルはそれまで目を覚まさず、帰還してから一時間後に目を覚まし直ぐ様報告することになった。いるのは部隊長のはやてとフエイト、なのはにクロノだった

エクセル「あそこは人体改造の実験施設だった。被験者はどこかで捕まえた魔導士に殺し屋、何の実験かは分からなかつたが実験に使うものはわかつた。」

はやて「同じ天使だつたエドやつたんやな？」

エクセル「ああ、惨めに人体を引っ搔き回されて言語は成り立たたず、力は反発し制御できずまるで野獸そのものだった」

パッドを操作して画面に映像を表示する

エクセル「これは成功した実験の記録みたいだ。成功した数は五体以上にも満たないが、もつ増やすことは出来ない。エドを倒したからな

映像には黒い翼を生やした魔導士が立ち上がった。それが数人

なのは「この相手は凄く強いとか?」

クロノ「あり得るかもしれないな。エクセルと同等、もしくはそれ以上に強いか…」

フェイト「そうなると厄介だね。話を聞いてると手強いって感じる

なのは「それが相手だとストライクカノンしかない今だと厳しいね。エネルギーはともかく素材には限りがあるし」

エクセル「〇〇（ダブルオー）もまだ未完成…少なくとも、武器の種類は後2つは欲しいところだ。」

ヴィータのように一撃必殺の物、集団制圧を可能にする物もほしいな
フェイト「なら管理世界の中でガジェットの工場を制圧するのは?
素材ならたくさんあるはずだから

クロノ「それもいいが人手が足りない。」

エクセル「なら、マテリアルズを連れて行きましょう。俺も管制く
らいなら出来ます」

—深夜 フェイトとエクセルの対話—

一つのベッドに寝ていた俺とフェイト。

エクセル「フェイト……」

フェイト「ん~……なーん、エクセル」

寝ていたフェイトは田元をこする。

エクセル「もし俺が…みんなと別れることがなったら、フェイトはどうする」

フェイト「ふあ~……元のたぐいだの急いで」

あぐびをしたフェイトは俺の腕にくつこいた

エクセル「なんでもない。今田の怪我が響いたらどうして」

フェイト「その割にはせつない元気だったよ……」

エクセル「気にしないでくれ…あまつ蝶るとキスして口をふせぐが」

フヨイト「ううん、明日は早いもんね」

一朝 整備室

フレシア「この武器…なんだか気味悪いわ。」

ソラ「というと…？」

フレシア「なんだか…何かを感じるわ」

2人は水槽に入っている回収してきた剣を調べていた。

フレシア「刀身からは想像以上の鉄分が検出され…さらには魔力無効の能力もある。それに予想してたより固く、新種の元素か何かを排出…・持ち主を蝕む…まるでウイルスね」

ソラ「生きた剣…そう考えてしますね」

そこにエクセルが入ってきた。

エクセル「どうですか、00（ダブルオー）の方は…？」

フレシア「まだまだ完成には満たないわ。あなたに言われた通り、色々試してはいるんだけど、システムの中核が問題なのよ」

整備室の隅に人を一回りほど越す装備が置いてあった。外見的としては装着パワードスースという感じだ

ソラ「父さんはこんな物のでどう戦うのですか？」

エクセル「これはあくまでも俺の専用装備。俺にしか出来ないことをする為の物だ」

俺は未だに完成していない〇〇（ダブルオー）を撫でた

プレシア「まあ、あなたが提供してくれた設計データのおかげで外側はバツチリだけど中身に何を積むかが問題、そこは考えてるの？」

エクセル「当然。なにしろ俺はこれで人と人の心を会話させるんだから」

それが俺の役割なのだから・・・

第1話 バトル開始（後書き）

ー次回予告ー

資源調達の為に、管理世界に入ったエクセル、フェイ特、エリオ、キヤロ。かつて平和だったミッドチルダを思い起こさせる街並みで彼らは調査を始める

そんな中、エクセルとフェイ特は不思議な少女に出会う

次回 訪問者

一プロメテウス

管理局を出発したエクセルたち。結局、4人編成という少なさで資源調達という訳でもなく、調査も兼ねている。資源の方はプロメテウスにいる整備員たちが転送を使って運びだしてくれる

エクセル「エンペラー……元地上部隊指揮官、局員としての経歴は残っているがそれ以前のものは存在せず、戦い方は部隊員達を傷つけない為に巧みな戦術を駆使する。やがてそれが評価され部隊は陸戦の中で1、2を争うほどのものとなり2年前、ヴァンデビル出現時に地上部隊ならびに民間の半数以上を自ら私物としたロストロギアで洗脳して掌握、ヴァンデビルの消失と共に決起、ミッドチルダ全域と管理世界の半分を手にし1つの国家を作り上げた。ロストロギアの詳細は未だ不明…」

俺はブリーフィングルームの艦長席でエンペラーに関する資料をまとめたファイルを読んでいた。他の席にはフェイトたちが座っている
フェイト「2年経った今でもロストロギアの詳細が不明だと、なんだか怖いね」

エリオ「でもたった1つのロストロギアで、数万の人たちを一種で洗脳するなんて普通は無理ですよ
しか」

エクセル「けど実際起きてるんだ。何だか気になる内容じゃないか
…俺としては特にな」

フェイト「それは追々明らかにするしかないけど、まずは今回の目的の説明をしないと」

フェイトはパットを叩き、転送場所を表示する。街の外れだ

エクセル「街は意外に穏やかだが、警備員と監視員が街を巡回している。ゆっくりしたいのは山々なんだけど、今は戦時中だ…」

エリオ「街の雰囲気に流されないよう心がけますー。」

キャロ「私も頑張りますー。」

フェイトは少し2人を気にしながらパットをもう一度叩いた。

フェイト「とりあえず目的地に行く前に街の様子を見て行動開始でいいかな?」

フェイトがこちらを見た。

エクセル「そうだな…装備の問題はないから後は予定ポイントに着くまで各自休むことにしよう」

そして數十分後、私服に着替えて目的地に転送し、街に進む
エクセル「あまり目立つことは出来ない。街に入つたら一手に別れ
よ」

エリオ「了解しました。それで別れるメンバーは？」

キヤロ「聞くまでもないと思つよエリオくん。フュイトさんとエク
セルさん…そして私とエリオくんだよ」

あつ…とエリオはフュイトを見て頭をかいた。

エクセル「まあ…なんだ。お互に何かあつたら連絡を取り合おう」

街に入り俺達は一手に別れた。街はいたつて平和だが、見回りがや
はり気になつてしまつ

エクセル「手配はされてないみたいだな」

フュイト「みたいだね。こつちには気に掛けないみたい」

俺はため息をついた。

エクセル「もう少し街を回りな。」

フェイ特「うん」

俺とフェイ特は街の中を走るといつまで回った。途中、エリオ達と連絡を取り報告しあう

エリオ 特に用立つことはないですね

エクセル「そうか、なら俺とフェイ特は目的地の調査をしてくる。見てくるだけだが——」

フェイ特『エクセル……ちょっと』

隣にいたフェイ特が念話で話し掛けってきた。

エクセル『なんだ? 報告途中なんだが……』

フェイ特『誰かにつけられてる。姿が見えないけど通信は切った方がいい』

エクセル「悪いなエリオ、また連絡する」

通信画面を閉じて、俺とフェイ特は歩き始めた。

フェイ特「ねえ、次はどこに行く? 私そろそろお腹すいたかも……」

エクセル「しあうがないな～お前は。よし、何か食べに行こう」

俺の腕に抱きついたフェイトと歩きはじめる。

エクセル『次の角を曲がる』

フェイト『解』

念話で伝えて直ぐ、人目に付かない路地裏に入る。
お互いで急いで隠れて身構える

すると、誰かが走つて路地裏に駆け込んできた。

エクセル「――――ツ――！」

？？？「――？」

大きなゴミ箱の横から相手に飛び掛かり、地面に押さえ込む。

エクセル「ん……？」

『フェイト……やうやう敵じゃないみたいだ』

俺は相手を見て念話を使ってフェイトに話かける。

フェイト『えつ……？』

奥の角からフェイトが顔を出した。そして、相手を見て困惑した

フェイト「あつ、女の子ー？」

？？？「女の子のなにが悪いの…？」

未だに押さえ込んでいた女の子が透き通るような声で言った。俺はその女の子から離れて謝る
フュイトは女の子に手を貸す

エクセル「ゴメンな。てっきり警備の人たちかと思つて」

？？？「ふうん…じゃあ謝りついでにこのデバイス借りるね」

女の子が持つていたのは俺とフュイトのデバイスだった

エクセル&フュイト「えつ…！？」

それを見て俺とフュイトは懐を探る。デバイスはなく、改めて女の子を見る

？？？「ふうん…金髪さんは大分使い込んでるね～調整もバッチリだし幸せなデバイスちゃんだ」

紫の髪と、メイドみたいな服装になのはに似た明るい声。

チョコン

？？？「それに比べてあなたのは不思議だね～神秘的っていうか、別次元つて感じかな？見たことのない形状だし、特別な部品を使つてるとか？」

チョコン

なにより髪飾りのはずなのに、『ウサギ耳』がチョコンチョコン動いているのだ

エクセル「それ返してくれないかな。お兄さんたちこれからお仕事なんだ」

？？？「ああ～～ゴリカのことバカにしてるでしょ～～背は～ん
なでも、れっきとした二十歳なんだよ～～」

二十歳という年齢に俺とフェイトは顔を見合わした。身長が160
あるかないかでどう見ても、二十歳には見えない

フェイト「そつ、そうなんだ。でもそれ返してくれる？えつと…」

？？？「私は天才博士のゴリカ・ミスマイールなんだよ ハロー～！
終わり」

天然な素振りを見せるゴリカ。

エクセル「えつと、ゴリカ…さん。もうデバイスは返して～～～

ユリカ「ならお兄さんたちのことを警備の人に言つていいの～？」

エクセル「うつ…」

ユリカ「冗談だよ 私、警備の人たち嫌いだから」

わははははと笑うユリカを見てフェイトは

フェイト『なんか…別次元のなのは見てる気がする』

デバイスを返してもうひたはいいが、ユリカはどうしても後をついてくる

逆に目的を告げたら「私がいたらあそここのセキュリティなんて1分もあればチョチョイのパーなんだよ」と言われて逆効果余計について来てしまつ理由を作つてしまつた。

でもユリカは見た目は少女だけど、本当に天才なかもしれないこと後々知ることになる

夜：施設は静まりかえつて人気は減り、警備のガジェット数機が見回つている状況だった。

エクセル「時間はちょうど21時…始めるか」

俺たちは近くのビルの屋上にいた。俺とフェイト、さらに合流したエリオとキャロはバリアジャケットをセットアップする。エリオは自分の髪と同じ色のストライクカノンを装備し、フェイトは試作改良した次世代型であるバルディッシュュザンバー？を持ち右腕に緊急用の魔力供給工ナジーを装着する

キャロ「私はフリードに乗つて上空から援護します。」

エリオ「なら僕は近くのビルからストライクカノンで射撃支援をしますね」

と作戦を練る前にユリカが間に入った。

ユリカ「ちょいとお待ちを皆さん！ここは、この天才である私に任せなさい あの程度ならハックすればどうってことはないよ？」

エクセル「はいはい…もう好きにしてくださいな。どうせ無理なんだから」

わあ～い と言った直後にユリカの前へ一気に6つの画面が表示され、ユリカはパッドを物凄い速さで打ち始めた。

目にも止まらぬ速さで画面がさらに2つ、追加表示されてもマルチロックしたかのような目で画面を見る。顔色、表情一つも変えずにこなしていくユリカに俺たちは驚くばかり

フェイント「すっ、凄い・・・」

唖然とするしかない

ユリカ「ガジェットの認識モードをオール解除して、施設の監視システムにアクセス うん、気持ちいいイツ～くらいに来てるよ～！映像をダミーと切り替えて、警報も作動させないようにひとつはい、終了。速いね～さすがは私（^_^）～」

▽サインをするユリカ。本当にあつという間に終わってしまった。マジで天才なんだなと実感した

エクセル「よ、よし…俺とフェイトが先行する。合図したら工場の周りを手当たり次第に撃つて構わない」

エリオ&キャロ「了解ツー！」

俺とフェイトはお互いに顔を見てからビルから飛んだ

エクセル&フェイト「GOツ…！」

ー？？？ー

？？？「襲撃…？それくらいのことじつに僕が出るところのかい？」

執務室で通信相手を横目で睨んだ一人の青年。エメラルドグリーンの短い髪を指で撫でる

警備員 申し訳ありません…相手は六課の者と推測されまして、配置されたシステムとガジェットはクラッキングされ、警備の者たちではとても…！

？？？「…わかった。5分で行く…それくらいは持ちこたえてみせ

る

通信を切った青年は今度は別の通信画面を開く。自分の主であるンペラーだ

？？？「マスター、聞いての通りです。私に武器の使用を

エンペラー よかろう。奴らには我々の力を見せ付けねばな…武器の使用を許可する

？？？「ありがとうございますマスター。このメビウス・アルフィミコウ、マスターの期待にこたえてみせます

エクセル「エリオは第2ポイントで停止中のガジェット郡を殲滅しろ。今なら攻撃も来ないはずだ」

エリオ 了解！！

エクセル「キヤロは結界を維持しつつ、周辺警戒だ。頼むぞ

キヤロ 了解、フリードと一緒に警戒態勢に入ります

名前で指示を出し、俺とフロイトは施設内を移動していた。

フロイト「ハアアアツ————！」

ザンバーを力強く振り下ろし床を碎くフロイト。その先には衝撃で床、壁などに叩きつけられた警備員たちが倒れていた

フェイト「これで物資搬入路は確保出来た。エクセル、船に連絡して搬入班を」

エクセル「了解だ。しかし、ユリカの腕も大したものだな。1分ちょっとで施設全体を掌握出来るとは」

船に連絡し画面を閉じて周りを警戒しながらユリカのことを話し始める

フェイト「本人曰く、やっぱり天才なんだね。一度もビックリしちゃった」

エクセル「あれで誰も目をつけないのが不思議なんだがな」

搬入班が転送して来て物資を転送ポートで直ぐ様運び始める。運ぶ勢いを早めれば、10分で終わるだろう。

ビーッ！…ビーッ！

エクセル「！？、結界内に転送反応！？」

フェイト「結界内に直接なんて…簡単に出来るわけがない！」

フェイトが走りだした。

エクセル「待てフェイト！！一人じゃ危険だ！！」

フェイト「私が時間稼ぐからエクセルは搬入路の維持を…！」

フェイトはそう言つと急いで行つてしまつた

エクセル「くそつ…搬入作業を急げ!!」

今の俺にはそれしか出来なかつた。

キンッ!!

エリオ「たあああああつ…!!」

施設の外ではエリオは転移してきた敵にストライクカノンを戦槍として戦つていた。相手の男が持つているのは銀色の重剣、一撃ごとにストライクカノンと同じ硬さというのが理解出来る

????「おもしろい武器だ…私の得物と同じ強度か」

エリオ「お前ッ…何者だ!!」

????「弱いキミに教える義理はないよ。キミの上司に会わせても
らいたい」

相手の男はストライクカノンを押し返した。エリオは脚に力を加えてなんとか耐える

フェイト「エリオ…!!」

エリオ「！？… フェイトさん…！」

フェイトが施設内から走ってきた。エリオは「助かった」という顔をすると男はチラリとフェイトを見てニヤリと笑う

「…ほつ… 彼女がテスタロッサか」

フェイトは連結されたライオットザンバー？を分解し、2つに分けてブレード？に変換する。雷鳴が鳴り男の前にフェイトは移動する

フェイト「轟け雷神！ ライトニングザンバー…！」

雷を帯びたライオットブレード？を振り下ろす。

ピカーーーン…！

雷が男に落ちた。

金色の炎が男を包み込んだ。焼ける異臭が辺りを漂う

フェイトとエリオは離れて身構えた。エリオはストライクカノンを砲撃状態で構え、フェイトはザンバー？に変えて膝立ち状態で待っていた

エリオ「倒したのでしょうか…？」

フェイト「そんな簡単なわけない… 相手が相手だから

燃えている男はゆっくりと平然と歩いてくる。燃えた皮膚が徐々に回復していき、体が元に戻る

？？？「このへりでないとまらないよ。ただの戦いでは私は満足出来ない…」

男の持っていた重剣が縮小していく、幅が広いレイピアに変わる

？？？「せつから名乗らせてもらひ…私は帝国軍地上部隊司令長官、Ｚ〇・Ｚのメビウスだ。」

メビウスはレイピアを自分の前に突き出しながら構える。忠実な基本の構えだ

メビウス「今回はたまたま遠征の最中だつた。ああ、死合おひじやないか…どちらかが死ぬまで…！」

そういつた途端、メビウスが走りだした。とてもなく速かつた少しでも気を抜いてたらやられるから

フヨイト「プラズマランサー…！」

金色のランサーとエリオのストライクカノンの攻撃が一斉に放たれた。メビウスはエネルギー弾を軽々と避けて真っ直ぐ向かってくる

メビウス「遅い…！」

メビウスはレイピアをフヨイトへ突き出した。その突きをザンバーで受け流し、回転してレイピアを持った手を横へ払う。正面ががら空きになつたメビウスへエリオは電気が走る左腕を突き出す

エリオ「紫電一閃…！」

胸に一撃をくらつたメビウスは後ろへ飛ぶ、一人はそう見えた

メビウス「どこを見ているんだい……？」

だが、メビウスはエリオの横に平然と立っていた

エリオ「なつ……！？」

空振りしたかのようにエリオは前によろける。メビウスはエリオの

足を払つて首を掴んで横へ投げる

投げられたエリオは地面を転がり倒れた

フェイト「いつの間に……」

離れてザンバー？を構えたフェイトはレイピアで遊んでいるメビウスを見た。

メビウス「私には魔力の込もつた技は通用しない。閣下に頑いた素晴らしい能力のおかげでね」

そしてレイピアを構えるメビウス

フェイト「お前…普通じゃない」

メビウス「人間風情と同じにしてもらつては困る。私は人間を越えた優一の存在なんだから」

フェイト「人間を越えた存在…なら、お前は人工的に作られた」

メビウス「 そうとも。 だが、 それはキミも同じではないのかい、 フ
エイト・テスターッサ? キミも母親に作られた人形だという話だが」

またもや同じことを言われた。もう聞き慣れた言い方だが、フエイト自身にとってはその話は好きではない

フェイト「私は人形じゃない！れつきとした母さんの娘だ…！…」

メビウス「愚かな…ならば———むつ。」

施設の方向から無数の剣、
槍がメビウスへ飛来し襲い掛かる。

メビウス「……」

だがそれはメビウスに一つも当たることにはなかつた。

メビウス「どうやら来たようだね」

施設の方向から翼を閉じた工クセルが歩いてきた。

エクセル「フェイト…纏うぞ」

フライト「——了解」

フェイドの前に立つたエクセルはブランド・ティータを構えた。

メビウス「キミがエクセルかい…なるほど、弟たちの“美味そつ”という意味が理解出来たよ」

メビウスは自分の唇をペロッ舐め回す。

エクセル「黙れ…お前と話す間は…もたない…！」

フェイト「ハアアアアアアシ――――――！」

フェイトが魔力をフル解放する。そしてエクセルの翼に金色の魔力光が吸い込まれていく

メビウス「なに…？」

翼が雷へと変化し、瞳の色は金色へ変わりブランド・ティータはリング似の雷が刃に取り巻く

エクセル「魔力解放、‘雷の女神’の魔力…ライトニングファンギ！」

ブランド・ティータを振るう。

爪のように線をなぞりながら刃と雷が伸びる

メビウス「くつ…！」

伸びた刃と雷がメビウスの周りを囲み

エクセル「雷滅ツ…」

エクセルがそう呟くと囲んだ雷が破裂し刃がメビウスを襲った。同

時にメビウスへ雷が落ちる

雷鳴が響きメビウスを焼いた。

エクセル「撤退するぞ。作業は終わらせた」

フェイト「ハア…ハア…うん」

魔力憑依は俺自身だけではなく、魔力を提供する相手にも微弱ながら負担をかける技だ。慣れればそんなに辛くはない

エクセル「あれが…俺たちの敵か」

エリオを担ぎエクセルとフェイトは転送され、すぐさまその場を去る

ピシッ…キシャ…

メビウス「……お…もじろい技だ」

焼かれた体が回復したメビウスは前髪をかきあげる

メビウス「魔力ではなく天候と物理の合わせ技とも見えるが…少し違うな」

ヴォン…

? ? ? 「兄様…」無事で?」

するとメビウスの後ろからメビウスに似た顔の女性が現れ歩いてくる

メビウス「お前も来ていたのか。いいのかい、任務中だろ?」

「平氣ですよ。誰も氣づいてはいませんから」

メビウス「そうかい…報告してくれ」

「奴らは対抗手段として新しい武器を開発中です。閣下に」
報告を――――」

メビウス「それはいいね。でなければ楽しくない……我々“オメガ”が存在するには対等の相手がないとな」

「プロメテウス内」

エリオ「すみません…お役に立てなくて」

エクセル「大丈夫だ…エリオなりにやつた。それでいいじゃないか…キヤロが上からちゃんと見ててくれただろ?」

キヤロ「やうだよエリオくん! エリオくんがピンチの時は私が助けるから――」

エリオが倒れたあとキヤロはすっと上空から防御魔法でエリオを守つていたのだ

フュイト「でもエリオ、あまり無理しないでね」

帰還した後は物質を運び、プレシアをはじめ技術者らが装備の開発に取り掛かった。そして何故か、船にこいつが紛れ込んでいた

ユリカ「やあやあ、お一人さん！無事で何よりだね～」

エクセル「…………どこから出てきたって…？」

整備士「搬入した物資の中からです」

報告を受けたエクセルはユリカの身元確認を済ませて、とりあえず技術力を試すためにプレシアの元へ連れていく

ユリカ「ほうほう…うんうん…わあ～」

ユリカはプレシアに話す前に端に置いてあつた〇〇（ダブルオー）へ走り寄り、目を輝かせながら観察し始める

プレシア「平気なの、部外者を入れて？」

エクセル「身元確認はしましたし、なによりデバイスを見分ける観察力もある…なにより開発中のあれに興味を持つのも、ハッキングやパッドさばきを見たら技術系で天才なんじゃないかと思いまして」

プレシア「天才とかいう人種は時に危険なのよ

ユリカはこちらに振り返り

ユリカ「ねえねえエッくん！」

エクセル「エッくんって…どんな呼び方だ」

ユリカ「エクセルだからエッくん それよりさそれよりさ…この開発途中の装備つて最終的にどんなのにするの…！」

ユリカは目がマーク状態…つまりあれだ…大好きなもの、気に入るものに對して興味を持つ子供のような目で見ているんだ

エクセル「そつ、そうだな…全身に装着するパワードースーツなんだがパーツやら動力系が色々な問題もある」

考えはあるだが、それを実用する手段がない
ということをユリカに説明すると次にとんでもないことを言い出した

ユリカ「私に造らして…！」

エクセル「…は、はい…？」

ユリカ「ねえねえお願…い…エッくんの考えてる設計を図にしてく
れたら私が実現可能にしてあげるから…」

エクセル「いや、だから…造るにあたって重要視するのはエネルギー
一源で…」

ピキーン！

ユリカの頭にあつた耳が立つた。

ユリカ「エネルギー源！？よつしゃーーー」の天才博士のユリカさん
にまつかせなさーい！！永久エネルギー源となる装置を3日で完成
させてあげる！…」

その発言にプレシアが反応した

プレシア「永久エネルギー源ってあなた…自分の言つてる意味を理
解してーーーーー」

ユリカ「しますよ～私がず～つと前に考えた理論を等々使える日
が来たのです！文句があるなら…はい！私の論文」

どこから取り出したのか、紙束をプレシアに見せた。見てみると、
なにやら理解できない単語や数値がずつしり書かれていた

プレシア「ーーーーー」

プレシアが論文に目を通していく、約5分経つと顔を青くした

プレシア「エクセル…ちょっと来なさい」

プレシアに連れられユリカから離れた。

プレシア「あの子…敵側につかなくて良かつたわ」

エクセル「どうこう事です…？」

フレシア「あの子の論文は太陽と同等のエネルギーをどこでも発生させるものだわ…下手したら次元を越えるエネルギーも」

エクセル「…………つまり…………擬似太陽を作りだせて、または次元を越えるエネルギーを作り出せると?」

フレシアがコクリと頷いた。
まさかと思つてしまつた

エクセル「それが本当なら……」

俺はユリカを見た。こんな天然の彼女を放つておいたらどんなことになつっていたことか

エクセル「なら……」

俺はユリカの方へ歩いていく

エクセル「ユリカ…そのエネルギー源の変換装置をこいつに積み込むのにどのくらいだ?」

ユリカ「変換にしたければエネルギーを小型の炉身に組み合わせして…邪魔がなければ1日で積み込み可能だよ あと出来れば全体改良もしたいから~計1週間かな~」

フレシアは頭に手を当てて「あらを見ていた

エクセル「わかつた好きにしてくれ……けど2つ条件がある、絶対に失敗しないこと、口外無用のこと」

ユリカ「むつ ふつ ふつ くん この天才ユリカ様に任せて！エツくんの為に失敗はしないから！！」

こうして装備開発が行われた

新しい協力者、天才のユリカを加えて

第2話 訪問者（後書き）

一 次回予告一

武装開発が進み、次々に装備品が完成していった

ストライクカノンに続き、近接戦闘、広域戦闘用が次々に出来上がりしていく

エクセル「ソラ……お前に聞きたいがある

そして作戦が始まる直前、ソラとエクセルの間に亀裂が

次回 魂の狭間と裏切り

エクセル「もしかしたら……仲間の中に裏切り者がいるかもしねない

第3話 魂の狭間と裏切り

ドオ――――ン――

ユリカー むゞ、むゞ、むむむゞ・！？」

ストーリン！

力のシャン！！

管理局内にある大きな実験場で機械と一リガの声が響き渡る。

ユリカ「よ～っし、バイパス問題…なし！エネルギー力場…全て問題なし！いくよ～」

ヰニイイイイイン!!
クワアアアアアン!!

エクセル「出力安定…各駆動系、全て問題なし…擬似太陽炉『ジエネラルドライブ』起動確認。00（ダブルオー）アインソフ…始動！」

俺は握っていたトリガーを引く。行っていたのは〇〇（ダブルオー）の起動実験だ

ユリカは宣言通りに機体を完成させてくれた
外装はまだだが、中身は完璧に仕上がつて俺は驚きを隠せないでいる

ユリカ「ジエネラルドライブは太陽と同じで永久エネルギー源で供給も必要ないけど、武装自体はそうはいかないんだよ。」

ユリカはパッドを叩きながらジエネラルドライブの注意事項を説明される

ユリカ「ジエネラルドライブは起動してるときに背中の装置からジエネラル粒子…簡単にいって、エネルギーを微弱ながら放出しているんだよ」

エクセルは背中を見る。青白い粒子が確かに出てている

エクセル「無駄なエネルギーを出してるのか？」

ユリカ「ノンノン これはエックくんの発想を実現可能にするためにやったものだよ」

エクセル「意識領域が実現可能だと? これでか…」

意識領域

それは自分以外の人間、または動物の意識を限られた範囲内で共有化すること

例えば、その範囲内で領域を展開する

領域内では考え、思いを共有することができる

洗脳されたミッドの人間を元に戻すには根を断たなければならない。

洗脳された人に特殊な念波を流せば洗脳は解けるはずだ

だが、これはエクセルでしか成り立たない

特殊な強い思念波を出せるのはエクセルしかいないのが現状だ

ユリカ「ヒツくんのパッドを組み込むからちょっと手伝って 武装の1つにビットがあるから、使うのに脳量子と電算処理をするから～ヒツくんの脳量子をちょっと測定ね」

ユリカがパッドを叩く

エクセル「さすがにここまで出来るなんて本当に天才だな」

ユリカ「私は最初から天才だよ～エヘッ」

その後は初期武装のチェックに加え、機体の様々なテスト

エクセル「休憩だな… また後で」

俺はパッドをいじっているユリカにそう言つて実験場を出た

廊下の角でザフィーラとばったり会った

ザフィーラ「体の具合はどうだ。」

エクセル「あまりよろしくない状態だよ… 1年保つか保たないかだからな」

ザフィーラは向こうの世界で吐血したあと臭いを嗅ぎとられ、優一俺の体調のことを知つてているのだ

ザフィーラ「戦いが終われば一段落出来るだろつ。そうすれば休み体を養うしかあるまい」

歩いていた俺はふいに立ち止まつた

ザフイーラ「ビビッた……？」

エクセル「終わったら……か」

本当に終わったら俺はどうすれば……

この体が保たないのなら体を捨て、天使である本来の姿に戻るか……？
俺の体が目的の為に散るならあながち間違つてはいないうが、そんな
ことをすればこの体の主は自然消滅だ

思えばこの体は借り物なんだ……同じ名前と似た姿をした

……いや、今考えることじゃないな

ザフイーラ「考え方か……」の事はいざれ既に知られるが、お前はそ
れにビビッ対応する

エクセル「まだ考え中だよ。」

ザフイーラ「そつか……お前の息子であるソラには話せないこのか

ソラ……か……話しても反発してくれるだらうな

そりにえればソラはビビッしゃつてこひに来たんだっけ？

俺は数ヶ月前に言われたことを思い起してみた

「気がついたりじてひにこたんです」

気がづいたら？

なんだ……何か引っ掛かるな

エクセル「ザフイーラ…ちょっと頼み事がある」

ソラ「えっ、身体検査ですか？」

デバイスルームでニルヴァーナを調整をしていたソラとそれを手伝っていたドゥーハ

ザフイーラ「エクセルからの頼みだ“お前の身体検査を急遽行いたい”だそだが」

ドゥーハ「身体検査って詳しい所とかは言つたかしら？」

ザフイーラはドゥーハを横目でチラシと見て

ザフイーラ「よくわからないが“脳内”だそだ」

ソラが驚く前にドゥーハの顔が一瞬だけ歪んだ

ソラの頭全体をシャマルにスキャンしてもらい、結果が出たことを聞き俺は医務室に急いだ

—医務室—

シャマル「ソラくんの頭の中は特に異常は見られなかつたわよ？指示された通りにやつてもみたけど、特に何かされたわけでもないわ」

それを聞いて俺は安堵した。

エクセル「良かつた」

だが、あまり内心では安堵出来ないでいた。

それから2日が経つたときの深夜、ソラの身体に変化が起きていた。なんでも、翼が痛いとか言つてゐるらしい

時間が深夜だけあって、焦る人は数人弱だ。ドゥーハに呼ばれてソラの寝室に向かう俺は少し焦りを感じていた

寝室に入つて直ぐ、ベッドにうつ伏せになつて苦しんでいるソラを見つめた。上半身裸状態のソラの背中には銀色の片翼が逆立つて開いていた

ソラ「ぐつ……うつ……ぐ……」

まだ寝室に来ているのは俺とドゥーハだけであった

エクセル「ソラ……どんな気分だ」

ベッドの横でソラの手を優しく握る。

ソラ「わから……ない……急に……体が……痺れ……ぐつ……たかと思つ……たら翼が」

呼吸が乱れて脂汗がにじみ出でていた。

エクセル「そうか……なんとかしてやるから落ち着いて」

俺はソラの翼を見つめた。

天使の第一印象であるこの翼は生やしている本人の色々な感情や思いが秘められている摩訶不思議な翼で、俺もたまによくわからないでいる

エクセル「あまり目立つ外傷はないな……」

ソラから手を離し翼を観察する。翼と生えている部分も特に目立つ傷は見受けられない。

そつしていると、ドゥーハがソラの手を両手で優しく握る

ドゥーハ「大丈夫よ……安心しなさい」

ソラ「ハア……ハア……ドゥー……ハ……」

優しく話し掛けているドゥーハをソラは少しだけ笑う

エクセル「外じゃないとすると……」

俺は辺りを見渡す。

エクセル「んつ……？」

机の上に見慣れない物が置いてあった。それは、針付きではなく注入用の注射器だ

なんだ……何で注射器なんかあるんだ？

俺はチラシとソラへ振り返る。ソラにドゥーハが優しく慰めていた
どうする……聞いたぞすか？

エクセル「—————」

アンプルには“精神安定”と書かれている。こつそりと開いていた
引き出しの中を探る

手探りで中を確認する……いや、までもなかつた
手を入れて直ぐアンプルと同じ手触りの物に触れた

これは……と思い俺は引き出しを大胆に開けると中は全部、空になつ
ているアンプルと中身があるアンプルで埋められていた

エクセル「—————」

怖く感じてしまつほどいの量だ。俺はソラを再度見る

苦しんでいる自分の息子が、実はいつそり薬を使っていたなんて想像したくもない

俺は空になつたアンプルを交換して、ソラの所へ戻る

エクセル「ドゥーハ、ソラの腕を抑えて！」

俺が持つてゐる物を確認するドゥーハは表情を変えずに片方の手でソラの腕を抑える

新しいアンプルが入つた注射器をソラの腕に当てる。

プシュウ

と小さな音が鳴り、アンプルからソラの体へ注入されていく

中身が無くなると、ソラの表情が緩む。逆立つて開いていた片翼がゆっくりと閉じていく

エクセル「ドゥーハ…お前知つてたな」

俺はドゥーハへ注射器を向ける。ドゥーハは顔を背けていて何も答えようとしない

エクセル「……答えられないならそれで構わない。ソラの側についてくれ」

注射器を机の上に置き、俺は部屋を出た

ドゥーH「-----」

部屋から離れながら、俺は袖の中からある物を取り出す。先程のアンプルだ

注射器を置いたときに、いつそり袖に忍ばせていたのである。

エクセル「精神安定」……本当にただの精神安定なのか

ソラのあの苦しみと初めてではなによつた落ち着き方
アンプルの使用量

エクセル「まさか……な」

ソラの隣に横たわるドゥーHはソラと自分を包むよつに毛布をかける

ドゥーH「-----」

ソラの頭を優しく撫でるドゥーH。その顔はどこか悲しげだ

ドゥーH「……ソラ」

私を人として扱ってくれて、愛してくれた人

あちらの世界で死を迎えるときには必ずと側にいてくれた

ドゥード「なのに私は――――」

一デバイスルーム

エクセル「つまりの中身は危険性が大だと言いたいのか…」

あの直ぐにデバイスルームにいたプレシアと〇〇（ダブルオー）の調整を行っていたコリカを呼び出し、アンプルの中身を調べてもらった。プレシアとコリカが言うには

プレシア「このアンプル内の薬は身体能力を極限状態まで引き出す強力な促進剤ってこと…」

コリカ「最近ミッドの闇市から出た薬みたいなんだけどね、噂だと身体が鉄のように強度になるとか、そのうち精神崩壊を起こすだとか嫌な噂ばかりなんだ」

そんなものをソラはいつ手に入れたんだ。

いや…よく考えみれば、こちらに戻つて来てからソラはほとんどの側

を離れなかつたはず……

フレシア「……それとね。わたくしゃーリーから連絡があつたんだけど……」

フレシアは辺りを気にしながら耳打ちしてきた

フレシア「最近、ミッド専用の転送ポートと外部通信を使った形跡があつたらしいわ」

エクセル「ツー？」

考えたくない」とだわつとフレシアが言つた

エクセル「仲間の中に……」の管理局内に裏切り者がいると言つたいのか……」

考えたくない出来事が現実になつてしまつたところとあまり好ましくない

誰もがそう思つだらう

エクセル「その件は任せてくれ。あとその薬の」とは内密に頼む

それから翌日

はやて「みんなに集まつてもらつたのは他でもない。いよいよ解放戦のスタートやー」

六課全体から少しだけ「よし」という声が聞こえた。

武装が完成し、数も揃つてきた。今日は少しだけ武器のお披露目だ

ヴィータ「ウォーハンマー…近接戦闘用の破碎武器か」

エクセル「艦船の装甲をも軽々と破壊する。考えて使うよつ」

武器の説明をしながら、俺は周りを見渡す

プレシアに言われたことを気にしながら、単独で調査していた

なのは「エクセルくん…ちょっとといいかな?」

なのはは制圧用の武装“フォートレス”のテストをしていた

エクセル「どうした…?」

なのは「このシールドのシステムなんだけど」

説明しながら俺はなのはを見た

さすがにあり得ない

なのはが敵なはずがない

そしてみんなは翌日午後に開始される作戦のために船へ乗船していた

船内の寝室でエクセルはため息をついた

エクセル「ハアー」

フュイト「どうしたの…?」

エクセル「いや……少し不安でな

ベッドの上で俺は翼を広げて、髪を整えていたフェイトの体を包んでいた

エクセル「もし……俺達の子供がが薬中だったら……どうする？」

フェイト「急にどうしたの……エクセルらしくないよ? ソラを疑うなんて

らしくない……か

確かにらしくないな……ソラを……仲間を疑うなんて

エクセル「なんでもない……忘れてくれ

俺は翼をフェイトから離して消す。

フェイト「そういうえば、エクセルの専用機は完成したの?」

フェイトがこちらを振り返った。

エクセル「後はOS設定と起動実験だ。OS設定はともかく、意識領域が一番心配なんだよ」

腕を組んだ俺の横へ髪を整えたフェイトが座る

フェイト「でも設計したのはエクセル自身なんでしょう?」

エクセル「確かにな……だけど、理論上は完璧なんだ。本当はもう少し時間をかけるべきなんだが……時間は待ってはくれないんだ」

俺は胸に手を当てる。

それに対し、フェイトは首を傾げていた

本当は・・・俺が考えた設計と理論じゃない
考えたのはアルザスだ。

あの時、アルザス宛の手紙を受け取った
中には〇〇（ダブルオー）の設計図と意識領域が事細かく書いてあ
つた

洗脳を解くには、天使の思念波をぶつけるしか方法はないと記されて

—ミッドチルダ 元地上本部—

かつての面影はなくなつた地上本部はエンペラーの指示で作り直さ
れ、今では鉄壁の巨体ビルになつていた

エンペラー「やつらが反撃を開始するだと…」

エンペラーの前に通信画面が開かれていた。

「…」「はい…予定は3日後と言つていました」

通信相手は女性だった。メビウスと一緒にいたあの女性だ

エンペラー「…」苦労だった。それに乗じて、お前は任務を終えて帰

還するがいい」

「…? 「歸還命令…ですか」

エンペラー「そうだ…」さういふ部隊を展開せしる。戦闘に紛れて消えるのが得策である「…」

「…? 「…? 」

女性は困惑していた

エンペラー「どうした…まさか、奴らに情が移つたのか?」

「…? 「…? 」

エンペラー「ならば実行せよ…例え、お前がタイプ〇を愛していうがだ」

女性は頭を下げる

「…? 「了解しました…マスター」

通信が切れた。

部屋の片隅から5人の男女が歩いてくる

「…? 「よろしくのですか、あいつは奴らの所に居すぎたのでは?」

「…? 「あら、私たち中で一番適格だったのがあの子だけでしょ?」

少年少女はエンペラーの左右に立つていった

？？？「確かに……潜入に関しては、彼女ほど最適なのはいなかつた。」

？？？「でも、やはり長く居すぎたわ。あの子の顔に闘志は感じなかつた」

青年と女性がエンペラーの斜め前に立つ。さらに端っこでは
？？？「そんなことは決してでもこい……俺は早く、あいつらと闘いたいんだよー。」

闘争心にかられた青年が息を荒らしていた

エンペラー「ふつ、まあ落ち着いたまえ……メビウスを含めて、君たち全員を戦場へ出してあげるよ。」

エンペラーは窓の外から街を見下げる。

エンペラー「冥王の軍隊に我が忠実なる部下の“オメガ”が最強だと彼らに証明しようではないか。」

全員がニヤリと楽しげに笑う。

エンペラー「そして……史上最強の彼が復活すれば、我らに歯向かう者はいなくなる」

エンペラーの高笑いが部屋に響き渡った

作戦の為に管理局からヴォルフラム、プロメテウスを含めた艦船全てが出発した

六課に加えて、武装全隊

武装隊はストライクカノンとウォーハンマーに各々デバイス持ちは次世代型に改良した編成

今回の目的は2隻ずつによる各世界の都市制圧だ
情報によれば管理世界の端っこは敵の主力は薄く、そちらを他の部隊に任せ

六課は敵の主力が集まる世界に向かう

着くまで後、数時間

他の部隊は既に戦闘開始し、制圧していくところもあった。

エクセル「あと数時間で到着する。各員は武装チェックを怠るな」

ブリッジで指示を出しながら俺は考えにふけっていた。

ソラ…お前は俺の大切な息子だ。だが、お前はなにか隠していないか?
俺に言えないなにか…いや、それか記憶がないのか

なんにせよ…いずれわかることだが、裏切り者がいるのは考えたくない
そいつがお前に薬を渡したのならば…俺は

アリサ「エクセル、はやてから作戦通達よ。」

エクセル「読み上げてくれ」

アリサ「プロメテウスは衛星軌道で待機し〇〇（ダブルオー）の最終調整後、上空より本拠地を強襲…だつてさ」

エクセル「了解した。フェイト、後は頼むぞ」

フェイト「うん、了解」

ブリッジでの指揮はフェイトに任せ、俺は格納庫に向かう。途中、ドゥーエとばつたり会った。通信室から出てきたようだつたが

ドゥーエ「あつ――――」

ドゥーエがこひらひて気付いた

エクセル「通信室でなにをやつてるんだ」

「ドゥーエ、いえ…なにも

体がふらついている。

ドゥーエの顔を見ると、少し疲れているよう思える

エクセル「さすがに疲れるか？」

「ドゥーエ」「いえ…この程度は

俺はため息混じりに

エクセル「ちよつと待つでる…ソラを呼んでやるから」

ソラとこうつ言葉に反応したドゥーハ。俺は背を向けて通信端末を開く
あと、ドゥーハは横から俺の手を止めた

エクセル「ドゥーハ…？」

間近で見たドゥーハは息が多少ではあるが荒かく、手の体温が高か
った
もしやと思い、俺はドゥーハの頭に手を当てる
俺の考へは的中した。ドゥーハの額も十分暖かい

エクセル「お前、凄い熱じやないか…」

ドゥーハ「…………を」

ドゥーハが小さくなか咳いたがうまく聞き取れなかつた

エクセル「？…おこ、ドゥ…………」

突然、ドゥーハが首に両腕を絡めてきた。その勢いで壁に押しつけ
られた

ドゥーハ「あなたの…血を…私に…／＼／＼／＼／＼」

そう言つて間をあけずドゥーハは俺の唇に自分の唇を重ねてくる

エクセル「んぐ…！？」

ドゥーエは唇を離して、少しだけ離れる。驚くもつかの間、その直ぐ近くでバサッと紙が落ちる音がした。

俺は音がする方へ振り返った。そこには田を見開いたソラが立っていた

エクセル「ソラ…」これは、その

ソラ「―――人の女になにしてるんです」

当然怒るだろ？。当たり前なことだ

ジャッキ！

しかし何の冗談だろ？か

ソラはニルヴァーナの銃口を押しつけてきたではないか

エクセル「おい…何の冗談だ」

至近距離だからわかる…ソラの目に怒りが見えた

ソラ「…」

ソラはなにも答えそうもなかつた。俺はチラッとドゥーエの方を見た
だが何故だろ？か…誰もいないではないか

ソラから今度は殺氣を感じた。

エクセル「ソラよ…何故そこまで怒る？今はドゥーエが仕掛けた
ことで」

ソラ「そんな」とは、関係ない！」

ソラ「そんな……そんなだから……未来の母さんは悲しむんじゃないかな？」

怒鳴ると同時にソラからの勢いある一撃を顔に食らった。

エクセル「！」バカが……！」

今度はエクセルがソラの胸ぐらを掴み、殴り飛ばす。ソラは壁にぶつかる

エクセル「今の俺が思つてゐる」ことを語つてやる……ソラ。この船の中に、いや……」

俺はその先のことを語つて止めようとしたが

エクセル「……仲間に裏切り者がいる」

ソラ「……？」

エクセル「ソラ……俺はあまり仲間を疑いたくない……だから」

ソラ「だから……なんだと語つのですか……父さんは、あなたは仲間を疑うのですか……」

俺はソラから離れるよう歩きだす。ソラはふらふらと立ち上がり、エクセルの後ろ姿を見つめ

ソラ「……俺はもつ、あなたを父さんとは呼びません。命令にも従いません」

格納庫で〇〇（ダブルオー）の最終調整をしていたユリカを俺は見ていた

疑うべきは外部からの協力者であるユリカだが、ここしばらくは格納庫に入りっぱなし。近くにはプレシア以下数人の技術者がいる見られている中で、堂々とやりはしないだろう

ユリカ「さてさて、武装チェックしちゃおうか。ビットを操作してみて」

エクセル「ああ…」

俺は集中して攻撃ビットを操作する。プラスター・ビットに似ているが強力なエネルギー砲だ

操作はプラスター・ビットを使つてるなのはから教わった

後はストライクカノンにブランド・ティータ、状況に応じて武装を変える

エクセル「チェック完了。後は実戦あるのみか

ちょんちょん

ユリカが頭につけた耳を動かした。

ユリカ「はい、いざといつときの量子化装置」

ユリカが渡してきたのは銀のブレスレットだ。いざといつときのために〇〇（ダブルオー）を量子化してしまうためだ

すると、ブリッジから通信が入った

フェイト エクセル、本局から連絡があつて作戦場所に向かつた部隊のほとんどは目的を完遂したつて

エクセル「なら、今から向かう場所は危険性が上がるな

一数時間後

プロメテウスは衛生軌道で待機し、ヴォルフラムは大気圏に突入し敵地に侵入する。

はやて「総員、戦闘開始や！主砲のアグレッサー1、ライオット3、攻撃開始！！」

甲板にいたなのはとエリオはストライクカノンを構えた

なのは「了解ッ！！目標、敵本拠地ビル並びにその周辺基地！スト

ライクカノン、撃ちます！！」

なのはとエリオはストライクカノンを撃つた。

ズドン！ズドン！

拡散設定にしたストライクカノンのエネルギー弾が基地に命中した

エリオ「初弾命中……！」

なのはは近くに置いていたフォートレスを装備する。

なのは「高町なのは、フォートレス……行きます……！」

なのはが飛び立つた。

ヴィータ「アグレッサー2……行くぜ……！」

ウォーハンマーを持つたヴィータが出撃する。

次々と地上、空、船護衛に別れてそれぞれ出撃する

－プロメテウス－

アリサ「戦闘が始まつて約15分、敵のほとんどが出ていったわね」

フェイド「肝心の本拠地は未だに動きはないけど、頃合いかな」

エクセル『そうだな：必要最低限の数は出てきた。』

格納庫にいた俺は既に〇〇（ダブルオー）を装備していた。

フェイド「私は出られないけど、『気をつけてね』

エクセル『大丈夫だ。―――射出準備』

ブリッジメンバーが復唱して、射出準備を始める

すずか「射出口解放します」

射出口でエクセルは立つた。

フィールドで守られているとはいえ、衛生軌道からの突入だ。『気を抜けない

ユリカ『私が作ったカタパルトの出番だよ！その場で使えるから』

リッジに報告して上げて！」

エクセル「了解！カタパルトスタンバイ！」

フェイト『射出バレッジ、ボルテージ上昇… 320、400、500、600、700を突破、射出タイミングは任せるよ』
俺はカタパルトに接続する。ストライクカノンを装備し、小型のビット10機を翼に格納した00（ダブルオー）は今まさに飛び立とうとしていた。

エクセル「了解…00・セフィロン、エクセル・アーシュライト…出る…！」

一地上 ヴォルフラム ブリッジ

シャーリー「軌道上のプロメテウスより連絡、アーシュライト執務官が出撃したそうです。後3分で大気圏を抜けます」

はやて「了解や。出撃中のアグレッサー隊とライオット各員に連絡

！陣形を変えつつ後退してガジェットと空戦隊を出来るだけおびき寄せるんや！」

敵魔導士隊長「なんだなんだ呆氣ない！俺達が怖くなつて後退し始めたか！！」

本部にいた隊長は笑い飛ばして全員に追撃を命じる

敵魔導士隊長「奴らを叩きのめして手柄を上げよ！…」

この隊長はまだ気付いていなかつた。この本部の遙か上空から狙い撃ちされるとは

そしてそれは起きた。

ドカーン！！

爆発と共に六回建ての本部が衝撃で立てに揺れた

敵魔導士隊長「なんだ！？」

一度収まつてはまた揺れる。それが繰り返され女の通信士は

通信士「じょっ、上空より砲撃です！－基地のガジェット格納庫全て致命的なダメージを負いました！－出撃不能！－！」

隊長はバカなど言い放つ。そして警報が響く

通信士「上空より接近する物体あり！－はつ、速い！－！」

敵魔導士隊長「周辺のガジェットと魔導士隊を全て呼び戻せ！－！そいつを落とすのだ！－！」

上空からの砲撃を終えたエクセルはストライクカノンを量子化させて格納する。

エクセル「さてさて、ガジェット格納庫はしばらく使えない。となればこっちは来るガジェット全てを倒すだけ！」

魔導士隊よりスピードが速いガジェット改が見えた。一いちらを見るやいなや、攻撃を仕掛けてくる

エクセル「おつと…そんな攻撃はお見通しだ」

ブランド・ティータを抜いた俺はガジェット改、計80機に向かって飛ぶ

エクセル「いけつ－0（オー）ビット－！」

翼に格納した全ビットを射出した。射出されたビットはガジェット

に向けて高速で飛来する

エネルギー砲を撃つて次々にガジェットを落とすビットたち。翼を広げて飛翔する〇〇（ダブルオー）を追撃するガジェットに向けて俺は実体剣状態のブランド・ティータで斬り裂く。

エクセル「ふつ…雑魚が寄つてくるな」

3分経ち、ガジェット改は全滅した。ビットを全て格納し残るは魔導士隊だけ

エクセル「さて本名の『登場だ。粒子濃度、180から300へ…粒子拡散…』」

魔導士隊に向かつて、粒子を散らしながら飛翔する〇〇（ダブルオー）。魔導士達の攻撃をギリギリで避けながらも粒子を辺りに撒き散らしていく

風に乗り、設定した範囲で拡散は留まつた

だが、その粒子はヴォルフラムまで及んでいた。

辺りを粒子の色が包み込み。

エクセル「粒子フィールド形成完了…ジェネラルバースト…」

エクセルが言い放つと青白い粒子が霧のように周りを染める

六課メンバーと魔導士たちは顔に手を当て目を庇う。

『なんだこれは！？どうなつていいの…』

『ああ…声が、声が聞こえる…』

『うわああああーーーーーーーー』

魔導士たちは自分の声だけでなく念話以上に心に響つたことが広がつていく

意識の領域空間、それが今のこのフィールドだ

なのは『光が広がつていく』

はやて『これがエクセルくんの救いの手…希望の光なんやな』

エクセル『目を覚ませ！お前たちは操られているだけだ…』

俺の天使としての思念波を魔導士たちにぶつけた

エクセル『エンペラーにとつて、お前たちは駒に過ぎない…！…思い出さんだ…自分たちの本来の使命を、意識を…！…本当の心を取り戻すんだ…！…』

混乱した魔導士たちが頭を抑えはじめた

エクセル『そのまま奴に身を任せれば、お前たちの体は崩壊するだけだ…目を覚ませ！魔導士たちよ…！…』

パリンッ！！

と大きな割れる音が辺りを支配する。魔導士たちを縛っていた呪縛が次々に解き放たれていっているのだ

俺は安堵した。

フィールドが消え、粒子が散っていく

ビー、ビー、ビー

エクセル「オーバーヒートか…まだ炉心が慣れていないんだな」

ダブルオーから鳴るオーバーヒートの音を止め、冷却を始める解放された魔導士たちは歓喜に溢れていた。どうやら、操られていたときの記憶があるようだ

『……』

『……』

エクセル「ん…？」

どこからか声が聞こえてくる。まだフィールドの影響で粒子が残っているからか？

『なんで…』

エクセル「この声は…」

だんだんと声の主がわかつてきた。

エクセル「ソラ……？」

『あなたの関係は任務……遊びだったの』

とソラと軽く呟つてるのは

エクセル「こっちもドゥーハ……？任務つてなんだ………まさか……」

俺はドゥーハの言葉で確信を得た。

少し離れた場所で一人は空中戦を行っていた

飛べないはずのドゥーハ、ビルを足場に跳躍して空中に行くソラ

ソラ「ドゥーハ、遊びつてなんだよ……」

ドゥーハ「そのままの意味……」

ドゥーハは爪で片方のニルヴァーナを弾いてソラを横から蹴り飛ばす。

ソラ「ぐつ……うわ……！」

受け身を取りつつも足場がなかつた。

そこへダブルオーを量子化したエクセルが飛来する

エクセル「ソラ……！」

片方のニルヴァーナからアンカーが伸び、壁を使ってビルの屋上へ着地する

エクセルの他になのはが着いてきた

なのは「ドゥーハ、あなた何で……！」

ドゥーハ「……教えてあげましょ！」

ドゥーハが片手を上げた。

その途端、なのはの背中に黒い影が現れ

？？？「もひつたぜ……！」

生意気そうな声を出す青年がなのはの首へ戦斧を振り上げる。完全なる背後を着かれたなのは
防御も間に合わない

エクセル「なのはッ……！」

叫んだエクセルの横を金色の閃光が通り過ぎ、青年の横へ現れる

？？？「なんだあ……！」

次に青年がなのはの後ろ側を横へ飛んだ

「フエイト」遅くなつて「ゴメン、なのは……！」

フェイトだ。フェイトが青年を蹴りで飛ばしたんだ

なのは「ありがと、フェイトちゃん」

互いに背を合わせた2人

ドウーハ「余計な邪魔を…」

？？？「おーおー…人の邪魔すんじゃねえよ…」

フェイトへ短剣を向ける青年。エクセルはドウーハを見ながら身構える

エクセル「ドウーハ…やはり内通者はお前か」

ドウーハ「バレる様に仕組んだのよ…逃げる手段として」

エクセル「自らを危険にしてまで逃げるか…いい判断とは思えないなドウーハ。そもそも正体を明かしたらどうだ」

ソラ「正体つて…なにってんだよ」

ドウーハは田だけチラッとソラを見る

ドウーハ「これが私の…本当の姿よ」

自分の顔に手をかけるドウーハ。シユルリとなにかを解くような音と共にドウーハの顔から体全体を光の紐と化して姿の全てを解く

そこにいたのは、メビウスと先ほど現れた青年と似ている女性がそこにいた。

赤い長髪、金色の瞳をした奴がドーカーHといつ偽の仮面を被つて

？？？「私はエンペラー閣下直属部隊“オメガ”所属、偽りの仮面リューネ

これで繋がつた。

ドーカーEが向こうで過ぐしたといつも一年間とHドガ発した言葉の意味、ソラの部屋にあつた最近の薬品そして通信室の出入り

エクセル「…最初から俺たちを騙していたのか！」

リューネ「……そりゃ、私は閣下の命でドーカーHといつ偽りの仮面を被りあなた達をずっと監視してた」

？？？「おまけにいい発見も出来たしな…お前を取つ捕まえてマスターに届けてやる…」

リューネの横に来た青年はソラを指差した

ソラ「その前にお前も名乗つたらどうだ。」「

ニルヴァーナを青年に向けるソラ

？？？「俺はこいつと同じ、マスター直属部隊“オメガ”戦狂いのマキオだ！呼び名の通りの戦い好きだ！！」「

黄緑色の短髪に青年のよつで小さな顔、そのオレンジの瞳と荒れ狂う息遣いは獲物を狙う獣だ。戦闘狂だということを促せる

マキオが持っていた短剣を構える

ソラ「狂った奴が…」

見合つ2人

エクセルとフェイトとなのはは未だリューネを見ている
そして、緊急連絡が入った

はやて『ヴォルフラムより全戦闘員、迎撃態勢や…』

エクセル、なのは、フェイト「…？」

はやて『マリアージュや……とてつもない数のマリアージュが現わ
れたんや…』

フェイト「マリアージュつて…？」

さすがに困惑した

マリアージュ、それは冥王イクスが生み出される不完全な戦闘兵器。
こちらに戻つて来て以来、イクスは確認出来ていない
捕らえられたという以外になかったが、まさかマリアージュを

エクセル「イクスに何をした！？」

リューネ「何も…ただ、言うこと聞かないので洗脳させてもらいま
した」

スバルたちがいる戻画に彼女は現れた。無表情で目を見開いたままのイクスがマリアージュを引き連れている

スバル「イ…ク…ス…」

そんな姿を見たスバルは言葉を失う。

????「冥王様、あれが我らの敵です。」

????「さあ、マリアージュに殲滅の指示を」

イクスの左右に短い金髪の青年と同じく短い銀髪の女性が立つ。美少年と美少女という類だ

お互い兄妹のような姿で田はお互い縁

スバル「お前たちが…イクスを…！」

????「私はエンペラー閣下直属部隊、先読みのイザヨイ」

の方はイザヨイと名乗る

????「そして俺は、先駆けのイザナギ」

男はイザナギと名乗つた。

ティアナ「スバル！あまり突っ込んだじゃダメよ！！」

スバルの隣で身構えるティアナ
イクスが片手を上げるとマリアージュたちが前進してくる

スバル「わかつてゐよティア！だけど！！」

マリアージュが進んでくる中、背後には救出した魔導士たちを逃がすためには戦うしかない

スバル「イクスを取り戻すにはこいつらを倒さなきや！」

ティアナ「この数で戦つて勝つ勝算はないわ…そのくらいわかつて
るでしょ。援護するから敵を牽制するの…いいわね2人とも！」

スバルの横に立つたエリオとティアナの後にキャロが「はい！」
と返事する

スバル「エリオ、まずは中央に穴を開ける。そうすればマリアージュ
は自爆するし道が出来る！」

エリオ「了解！」

エリオはストライクカノンの砲身を中央に向ける。リボルバー・ナックルがカートリッジを2つ消費し、風圧を作りだす

スバル「ジェット！」

マリアージュがそれに反応するが動きは前と変わらず遅かった。

スバル「リボルバー！！！」

巨大な風圧がマリアージュ軍団の中央を吹き飛ばし、そこへエリオがストライクカノンでマリアージュに追加攻撃する。砲撃を食らったマリアージュはその機能により自爆し、爆発で道を開けるはばだった

だが、しかし――

マリアージュは自爆どころか、逆に勢いづかせてしまった。しかも前とは遙かに違っていた動きも、武器も

ティアナ「マズい！！キヤロ、防護フィールドを！！」

キヤロ「了解です！！」

キヤロは素早く詠唱を行い魔導士たちを防護フィールドで囲む

マリアージュたちが駆けた。

スバルたちに向かつて全速力で

スバル「はつ、速いツ！！！」

動搖するスバルにマリアージュの一体が大剣で斬り掛かってくる。その剣はエクセルたちが回収してきたものだ

スバル「ツ：ソードブレイク！！」

左手に装備していた対格闘戦用の装備、ソードブレイク
見た目は腕全体を包む手袋だがその名の通り、対格闘と剣用に開発
したものだ。

ガシンツッ！！

真剣白羽取り

大剣を両手ではなく、その片手（左）で掴み

パキパキ…ガシャーン！！

その大剣にヒビを入れ、そのまま叩き折る。

スバル「ハアアアアツ…！！」

マリアージュをリボルバー・ナックルで弾き飛ばす。

マッハキャリバー「ウイングロード…！」

空中にウイングロードを引き、イクスたちまで走る

ティアナ「どきなさいよ…！」

クロスファイサーをフランクスシフトで撃ちだすティアナとストライクカノンで応戦するエリオ。マリアージュを蹴散らすがクロスファイサーを剣で弾いて突破するマリアージュもいる

ティアナ「このままじゃ…！」

スバル「イクス・・・・・・・ツ！」

走ってきたイクスに手を伸ばすスバル。だが、イザナギとイザヨイ
がシールドでそれを阻止

スバル「どけえええ――――！」

リボルバーナックルでシールドを碎くスバル。

イザナギ「どうやら呪きのめさなきやわからんようだ」

イザヨイ「痛い目にあわなければね」

エクセル「マリアージュは空を飛ぶのか！？」

エクセルたちの周りを40体のマリアージュが包囲する
マリアージュは空を飛ぶことは出来ない。それに今は武装が限られ
ている

“大剣”“銃剣”“双剣”だ。すべてあの時回収したものに酷似している

リューネ「まずは戦いなさいな…」

リューネとマキオはマリアージュの後方に下がる。

ソラ「ドウーハ…！」

追い掛けようとしたビルの屋上を走るソラにフェイトが待つてと止める

フェイト「今はこの状況の打開が先だよ、ソラ…」

ソラ「ぐつ……はい」

マリアージュたちはまだ襲つて来ない。一いち歩が動くのを待つているのだろうか

リューネが言つよつに戦つほかないのか

なのは「これだけの数…一人10体ずつ相手すれば

フェイト「でも包囲されてたら逆に危ない。武器は異なつてゐるに加えて、パワーアップしてゐる。どうにかして穴を開ければ

エクセル「なら…」

俺はフェイトとなのはに近づいて背中を向ける

エクセル「なのは、フォートレスとレイジングハートを俺に

「フェイト……はつ、そうだエクセルにはまだ」

「フェイトはわかつたみたいだ
俺が考えていることを

「俺だけだよ」
「俺は「フォートレスはともかく、レイジングハートを使えるのは
私だけだよ」

「エクセル「いやいや……扱うのは俺でも、なのはが使うのと変わらな
いよ」

「なのはからフォートレスを借り受け、攻撃できる形態のレイジング
ハートが横で浮遊する

「エクセル「いいか……俺の言つよつてしてくれ」

「なのは「う、うん……」

「丸腰になってしまったなのはをしつかり守るフェイト

「エクセル「俺とキミの魔力を“重ねる”……なのは、キミの魔力を俺
に這あわせるよつこ……そう、まるで」

「なのはは田を閉じエクセルは翼を広げる

「エクセル「大好きな人を抱きしめるよつこ……」

「なのはの体がエクセルに吸い込まれていく。彼女の魔力の色に変わ
った翼、片目だけ彼女の目の色に変わり
ブランド・ティータを握りしめる

なのは『感じる…エクセルくんの鼓動が…』

魔力憑依第2形態“フュージョン”
武器に変換する以外に相手の資質を受け継ぐ
宿らせ、相手の気持ちを受ける第2形態は互いに通じ合わなければ
ならない。仇をお互い同じであるように

なのはの魔力“戦乙女の息吹”

エクセル「なのは…キミは俺に委ねていればいい…フェイト、ソラ、
行くぞ…！」

その瞬間、マリアージュが動き始めた。

エクセル「レイジングハート、援護を頼む…！」

レイジングハート『はい』

ブランド・ティータを振りかぶる

エクセル「スター・ライトファンタム…！」

ブランド・ティータを振った。その時、砲撃をしたかのように閃光
が走る
ズドドドドド…！

マリアージュの軍団が爆発する。閃光の正体は閃光拡散砲撃
魔力拡散と砲撃を兼ね備えた攻撃である。エクセルとなのはの魔力

憑依だからこそ出来ること

要塞攻撃型のフォートレスより砲撃集団殲滅の魔力憑依は最強ともいえる。

エクセル「おっと、気をつけておかないと危険だな」

ブランド・ティータと片方に戦槍を持ち、マリアージュの軍団に突つ込み暴れるエクセル

フェイト「ハアアアツ————！」

二刀流のライオットを接続させてマリアージュを両断するフェイト。

一方、ソラは

ソラ「どけ……」

ドンッ！

キンッ！

ソラ「道を開ける」

マリアージュの持った剣が魔力を弾き、ソラはすかさず乱射し撃ち続ける。対処出来ないマリアージュが次々に爆発していく

ソラ「許さない……人の気持ちを踏み躡つたお前を俺は絶対許さない！」

怒りの眼差しがマリアージュたちの先にいるリューネを睨むソラ

リューネ「……」

あつという間に全滅させられたマリアージュ軍団

エクセル「リューネ…奴に伝えておけ。お前たちが何をしようとい、俺が…俺達がそれを全力で阻止してやる」

ヴォルフラムのはやてから帰還の命令が来ている

エクセル『なのは…大きいのを食らわす。フュイトはソラを氣絶させても連れていけ』

なのは『了解』

フュイト『頑張つてみる』

リューネ「あら、逃げるのかしら」

構え直したエクセルを見たリューネが一言

エクセル「今回はな…」

リューネ「それにしても…ずいぶんと急いだ感情です」と…まるで死が近いみたい

エクセル「…？」

思わず動搖するエクセル

なのは『？』今、エクセルくんが――――』

エクセル「……レイジングハート、チャフ！――」

レイジングハートがフォートレスを操作し、チャフを撒き散らす。

マキオ「けつ！こんな煙なんか――！」

マキオが短剣を振るう

チャフの煙が一気に払われた。

エクセル「……」

ブランド・ティータをリューネたちに向ける

“戦乙女の碎き”

エクセル「ヴァルキリアブレイカー――」

自分となのはの魔力を合わせた収束砲を放つ。

ズバ――ーン――

リューネ「！？」

マキオ「ぬあああ――！」

収束砲をギリギリで避けた2人、それを見ながらエクセルとフェイトに抱えられたソラは撤退していく

リューネ「逃がしましたか」

マキオ「ちきしょう… 次会つたら絶対！…」

スバルたちを助けを援護したあと俺達はその場から引き上げた。

撤退を完了した六課と他の部隊は管理世界から撤退し予想以上の結果を上げている

ミッド以外の全局員を救出出来た
だが――――――

エクセル「「ほつ！…」「ほつ！…」

局の自分の部屋に戻った途端に吐血した。

エクセル「なのはどの魔力憑依の影響がここまでか……」「ほつ！…」「ほつ！…」

必死にこらえても日に日に苦しみが増す

みんなに知られるのは時間の問題ではあるな

ピッ！

部屋のインター ホンだ

エクセル「…はい」

怪しまれないようこ一呼吸置いてから返事をする

チング エクセル、チングだ…今いいか?

エクセル「チング?…いいけど、少し待ってくれ」

俺は手を軽く洗い、とりあえず血だけを洗い落とした。

チングを部屋に招き入れる

ドウーハのことを知つてシヨツクなのか、少し表情が重い

チング「すまないな着いて早々」

エクセル「いや…平氣だ」

とりあえず、お互にソファーに座る

チング「エクセル、姉上のことなんだが……申し訳なく思つ

エクセル「なんで謝るんだ?あいはドウーハ本人じゃないのに」

謝るのなら俺ではなくソラなのだが

チング「2年前…いや、お前からすれば数ヶ月前だったな。姉上が生き返つたことを知つたあと、私は姉上自身に聞いたのだ。生き返つた糸を細かく――――」

ドゥーハ「死んだあと、もう何もかもどうでも良くなつて……ゆつべり休もうかと思つたら声が聞こえたのよ」

チンク「声……？」

ドゥーハ「あつ、まるで天からの声みたいにね。」

ドゥーハは笑い混じりに語る

ドゥーハ「そしたら、生き返つて私の為に役だつてくれだなんて……まるでドクターミみたいな口調で言われたわ」

チンク「そんなことが……」わからぬじられない」とですが

チンクは顎に手を当てる

ドゥーハ「その後はあつて説明した通り……あの黒いのが体にまとわりついて……よ」

俺は話を聞いてる内に疑問が浮かび上がつてきた

エクセル「ちよつと待て、それはおかしいぞ」

チンク「なにがだ」

エクセル「今の話からすると、少なくとも化けてたリュー・ネはドウ
ー・Hの生前データを事細かく知っていたことになる。でなければ動
作や癖、そして易々とヴァン・デビルに憑りつかれたりは——
——」

とまた疑問が浮かんできた。

チング「——エクセル、今なにか気にならなかつたか?」

エクセル「ああ、ヴァン・デビルに憑り込まれるには至難なことだ…
ましてやリュー・ネみたいな奴が簡単に……チング、死体の件に関し
て知つていることは?」

チング「姉上の墓なら聖王教会にあるが

となると……行かなきやわからぬいか

エクセル「チング、ドゥー工が本当に生き返つたと信じてみたくない
いか?」

チング「……そうか、なら行つてみるか

エクセル「ああ、ミッジに再度潜入する

—ソラの部屋—

ソラは荒れていた

部屋中をぐるぐる回り、あの薬を打ち続けた

ソラ「シはあ、はあ、はあ……」「ウーハ…ぐううう…」

襲ってきた苦しみを耐えながら散らばった数多のアンプルを払つて、新しいアンプルを打つ

ソラ「ふうーっ…ふうーっ…——」

落ち着いたソラはソラソラと立ち上がる。その瞳が赤く点滅する
うきえりながら

第3話 魂の狭間と裏切り（後書き）

一次回予告一

再度ミッドに潜入したエクセル、チング、スバル、ティアナ
チング「少なからず犠牲があるやもしれないぞ……」

聖王教会にやつてきた4人が見た恐ろしい光景

スバル「人のすることじゃないよ」

ティアナ「あんなのを生産してるだなんて……ヤバいわよ」

立ちはだかるオメガの1人
その能力に苦戦する4人

エクセル「限界だ……スバル、ティアナ……お前たちの“絆”を纏うぞ

そして、過去を思い出したソラ

ソラ「例え母さんでも許さないッ……！」

フェイト「……体が……動かない！？」

ソラが取つた行動とは

次回 刻まれし刻印

それは、あつてはならない刻印

第4話 刻まれし刻印

極秘でミッドに潜入することになり、メンバーはエクセルとチンク、スバルとティアナとなつた。

エクセル「では部隊長、アーシュライト執務官以下三名…ミッドチルダへ出発します。」

はやてに敬礼する4人

はやて「極秘とはい…ミッドに潜入、ましてや墓荒らし…騎士力リムから許可が必要やけど、今は許可とか有る無しの場合やないから特に注意することはない。けど…気をつけてな」

エクセル「了解」

リイン「それとスバルにティアナ」

スバル、ティアナ「はい！」

リイン「スバルのマッハキャリバーに現在のミッドに関する地図をインプットしておきましたし、クロスマリージュに消音のシステムを追加しておきましたから活用してください」

スバル「了解です」

エクセル「フェイト、ソラのこと頼んだぞ」

フェイト「うん、任せて」

転送ポートの前で俺とフェイトはソラのことについて話していた。あれから部屋にいたりいなかつたりの繰り返しでろくに話も出来ない

エクセル「嫌な父親だよな……俺つて」

フェイト「話が出来ないだけで考え過ぎだよ。戻って来たら、安心して話せるくらいには立ちなおせるように努力してみるから」

エクセル「……頼んだよ、お母さん」

俺とフェイトは離れて、他の3人のところへ

エクセル「行くとしよう」

4人は転送ポートの中心に入り、転送された。

フェイト「お母さんか……クスッ……なんか恥ずかしいな」

ミジドの離れに転送された4人

チング「周囲に敵なし、大丈夫だ」

場所は山沿いの街、今では廃墟だ

エクセル「ここから聖王教会までの距離は…？」

スバル「地図によると…警戒しながら進んだとしても30分は掛かるかな」

ティアナ「どう」とは意外と近場に転送されちゃったのね

チング「だが、それならば好都合だ。」

周辺を警戒しながら進み出す4人。廃墟の中をうまく利用し移動する

エクセル「ぐつ…」

移動しながら胸を抑えるエクセル

チング「どうした、胸焼けか…？」

エクセル「似たような…ものだ」

チング「そつか…」

ティアナ「着いたわ、聖王教会よ」

少し離れたビルの屋上から聖王教会の入り口を見る

スバル「見張り…多いね」

チング「6人か…嚴重だな正門のはずなのに」

エクセル「確かに墓は建物の向こう側だったな…どうやって越えるか」

考へていると突然、ティアナがクロスミラージュを構える

ティアナ「様はどければいいんじやない…それだったらこの消音が役に立つわ」

ティアナがスコープを表示する

エクセル「おいおい、まさか一気にやる気か?」

ティアナ「当たり前よ。向こうで鍛えた私の射撃力を侮らないでよ」

…

スコープを通して、ティアナが見張りの1人に狙いをつける。

ティアナ「全員、倒れた奴らを運ぶ準備…」

チング「そつか…見られず倒す隠密行動か」

スバル「さすがティア、頭いい!!」

エクセル「了解したよティアナ。じゃあ行くぞ、2人とも」

3人が屋上から離れていく。1人になったティアナは深呼吸してスコープを拡大する

ティアナ「本当は自信ないわよ。ヴァイスさんじゃあるまいし、一撃必中なんて難しいけど……射撃と狙撃は対一体。今は全力で狙い撃つ！！」

クロスミラージュの引き金を引いた。

消音なだけに音は静かだ。いきなり倒れでは次、次と見張りが片付いていく

エクセル「こちらエクセル、クリアだ。」

通信越しにティアナのいる屋上に親指を立てた。

ふんっ！と赤くなりながら笑うティアナ

見張りを廃墟のビルでバインドで拘束しひげーじの中に閉じ込める。

エクセル「さて、潜入するぞ……手に別れる。まず墓には俺とチングがいくスバルとティアナは教会の様子を探つてくれ」

ティアナ「了解よ」

通信用のインカムを耳につけたティアナ。インカムで俺とティアナが連絡しあう為だ

エクセル「あくまでも目的は偵察兼墓のチェックだ。無用な行動はするなよ…」

3人が頷く。

エクセル「よし、行くぞ…」

教会の敷地内でも見張りの魔導士が数人いた
エクセル「相手にしてる余裕はない。1、2、3で一気に駆け抜け
るぞ…」

チング「了解」

見張りの目がこちらを向かないところで

エクセル「1…2…3…行けッ」

俺とチングは敷地を駆け抜けた。墓に続く道の入り口を通り、姿を隠す

チング「場所はこの一番向こうだ……」

エクセル「要人スペースの真ん前か……」

静かに進む2人。目的の近くまで来ると

チング「おかしい……墓がない」

エクセル「ない……？」

チング「ないんだ……この通りの3つ田の場所にあるはずなのに」

チングが言う場所には墓が立っていた。だが、彼女の名前ではなく別の人物の名前だった

エクセル「本当にここか……？」

チング「ああ……確かに……だが、何故だ……なぜ……」

チングは地面に両膝をついた。

エクセル「チング」

チング「……姉上……あなたは一体……」

力のない声だ。こんな彼女は見たことがない

俺はパッドを表示し、辺り一体を探索する

エクセル「コード入力、一体の記憶を呼び起こす」

天使用のシステムは本当に万能だ。特に俺のは過去現在専用だから
引き出すにはもってこい

エクセル「チング……ここ元移した時はいつだ」

チング「私たちがまだ施設から出てない時期……7年前の冬だ」

時期を入力する。

エクセル「おかしい……アクセス出来ない……」

何回やってもアクセス不可、これは異常だ。普通のはともかく、俺
のやつでアクセス拒否はありえない

エクセル「チング……仮説なんだが、誰かがドゥーエの墓を移した。
または過去に――――」

ガサツ……

背後で足音が聞こえた

魔導士「なにをしている――！」

エクセル「！？」

振り返る。見回りの魔導士に見つかってしまった

魔導士「その格好、貴様ら局員だな――！」

槍を突き付けてきた。相手の魔導士はまだまだ若かった
恐らく配備された直後に洗脳されたのだろう

エクセル「おい若いの……槍を突き付ける相手を間違つたな。」

魔導士「なに……」

エクセル「やるのなら、仲間を呼ぶつてのが普通だ。低能か？」

魔導士「なつ……？……きつ、貴様……」

怒つて槍を突こうとした瞬間、背後にいたチングクが高くジャンプした。相手の目がそちらにいつた時に俺が魔導士の足を払う、魔導士は倒れチングクはその上に落ち
武器のナイフを突き付ける

チングク「あまり暴れるな……死ぬぞ」

墓にバインドで拘束し口を塞いだ魔導士を置き、ティアナたちと合流するために走っていた

エクセル「こちらエクセル、位置を知らせてくれ」

ティアナ「こちちは教会の中…なんだけど

エクセル「問題か…？」

ティアナ「…とにかく来て

合流した俺達は嫌な光景を目にした

エクセル「これはなんだ」

ティアナ「見ての通り…脳の残骸よ」

残骸…確かにそうも言える。だが、それは床一面なのだ
床一面にいくつもの脳の残骸と乾いた血の臭い

チング「なにかの実験を行つたようだな」

ティアナ「そり…あと、端っこにこれが」

ティアナが俺に何かを渡してきた。

エクセル「これは…」

見てわかった。形と色こそ違えど、それはニルヴァーナだった

エクセル「なぜ…こんな物が」

スバル「それだけじゃないよ…」

今度はスバルから何かのストックを受け取った。見覚えがあるものだ

エクセル「こ…これは…」

ソラが持っていた薬のストックだ。

何故だ…何故…何故なんだ！？

信じることが出来ない。考えてみる、リューネと一緒にいたソラがこれを持っていてもおかしくない…だが、しかし優一わからないのは

エクセル「ぐつ…ぐうううううう…――――ツ…！」

俺は胸を抑える。また吐血しそうだ

ティアナ「どう、どうしたの…？」

チンク「……その苦しみ方、胸だけではないな。正直に話してみろ

もう…誤魔化しきれないな…

エクセル「……なら生きて帰つてからだな。3人ともこれは内緒だ
…特にフェイト達にはな」

俺は口から血を吐き捨て「ブランド・ティータを引き抜いた。外がざ
わついてきた

血を見た3人は戸惑つ

エクセル「戦闘態勢だ…来るぞ…」

ドオ——ン——！

奥の壁が板のように真四角に倒れた。

？？？「ネズミがつるつるしていると思つたら、とんだ収穫だわ…」

入ってきたのはリュー・ネ達と同じ背丈、少女のような口調…オメガ
の1人

チング「貴様は…」

チングが身構える

？？？「あらあら～？あなたは確か、最後に捕まつたナンバーズの
…」

2人はどうやら顔見知りのようだ

チング「貴様は確か…ミヤビだったか」

ミヤビ「「」」答…そちらのお兄さんは知っていますよね、私の相方の
マキオを」

マキオ…あの戦狂いとか言ってた奴か…相方といふことは戦狂いと
は逆と考えるのが打倒か

スバル「気をつけて、あいつらじやないけど一人一人の能力は計り
知れないよ」

ティアナ「わかつてゐる…」

二人が身構える

チング「前より私の力は倍に増えてると知るがいい」

ミヤビ「強気なのね…でも私に勝てる?」

チング「勝つさ…!…!」

チングはナイフをミヤビに投げる。もちろん狙つたわけではない

チング「ランブルテトネイター!…!」

ミヤビの手前でナイフが爆発する。

ミヤビ「これが強くなつてますつて?笑わせないでよ

チング「力を借りりや…エクスカリバーよ

チング「力を借りりや…エクスカリバーよ

チングは懐にしまつて元愛剣デバイス、エクスカリバーを抜いた。

刀身はぼろぼろの状態だ。

チング「魔力解放…」

ミヤビの刃が一瞬だけ驚く仕草をした

チング「多少の犠牲はでるぞ…ランブルブレイカー…！」

エクスカリバーから爆風と共に光の刃が飛ぶ

ミヤビ「…！」

ミヤビに当たると刃が爆発した

チング「終わつた…」

エクセル「チング…」

チングはエクスカリバーを見た。刀身は砕けていた。残っているのは柄にあたる部分だけ

ミヤビ「あはははは…！」

爆煙の中からミヤビの笑い声が聞こえた。

チング「バカな…あの技を受けたのに」

煙が晴れるとミヤビはそこへ浮いていた。

ミヤビ「あんな攻撃は虫が触れたとしか感じないわ……でも、あなたはちょっと調子に乗りすぎたわ」

ミヤビはチンクを指さし

ミヤビ「他の三人含めて、潰してあげる。私の能力でね……」

ミヤビの体が変化を始めたのはその直後だ

ミヤビ「特別に教えてあげましょう。私たちの能力の原点、それは反射よ」

女であるミヤビの体が獣へと姿を変えていく。大きさも徐々に大きくなつていく

ミヤビ「人であると同時に人ではなくなる……オメガはパートナーの能力に反した力を使える。その理由の一つがわたし……」

幻獣……そう例えた方がいいのだろうか
ひとつずつ肉体に数多の生物の体

キメラに近いが明らかに違うところがある

それは、狂氣、

ミヤビ「戦狂いの真逆、つまり狂戦士……つまり私はバーサーカーのミヤビよ……」

頭は虎、尻尾は蛇、腕はまるで巨腕、胴体は翼が生えたなにか

エクセル「なんだ・・・」いつは

ティアナ「ツ来るわよ！！」

スバル「チンク姉！！危ない！！」

ミヤビの腕がチンクの小さな体を弾いた
それも力強く

予想以上に吹き飛ばされるチンクをスバルが受け止めるも後ろへ押
される

散開して叩くしかない！！

エクセル「ティアナ！！」

ティアナ「了解！！」

左右で挟みこむ

ミヤビ「遅い！！」

二人「！！？」

ミヤビが消えた

正確にはしゃがんだ。

エクセル「速い！？」

下からミヤビの巨腕が襲つ。

ダンッ！！

二人「！……！」

なんだ・・・この尋常ではない破壊力は！？

エクセルとティアナは地面へ着地する

ティアナ「けほ！…けほ！…」

スバル「チンク姉…」

チンク「大丈夫だ…」

頭から血を流すチンク
それを支えるスバル

ミヤビ「つまらないわよ雑魚ども！…もつとわたしを楽しませなさいな！…！」

「…笑つてやがる

エクセル「なら…」

体が重い・・・さつきのでどこかの骨がいかれたか

エクセル「ティアナ・・・纏つぞーー！」

ティアナ「・・・はじめてだけど了解したわ」

ティアナが俺の近くで魔力を開放する

エクセル「いくぞミヤビ・・・」

ティアナの魔力、輝きの銃剣、

翼と瞳がオレンジに染まりブランド・ティータが魔力を吸い銃剣に姿を変えていく

ミヤビ「へえー」

エクセル「ベレッタキヤノン！ー！」

オレンジの魔力徹甲弾を撃つ

ミヤビ「なにかしら・・・」

やすやすとよけられてしまつた

ティアナ『アンタまさか体が――――』

憑依していたティアナはエクセルの体の変化に感づいたようだ

スバル「ジェットリボルバー！ー！」

強力な風圧を放つスバル

ミヤビ「雑魚が出しゃせばほんとじやないよ・・・」

スバルの後ろに現れるミヤビ

スバル「！？」

ミヤビが拳を振り上げる

エクセル「スバル！！」

つい憑依を解いてしまった。俺はスバルの後ろに周りミヤビの攻撃をガードする

ドォン！！

メキメキ・・・

エクセル「ぐうううううつ！！」

骨が悲鳴をあげているのがわかる。ミヤビはティアアナとチングクの援護でその場から一歩引く

スバル「エクセル、体がボロボロだよ！！」

エクセル「バカいうな、このくらいの傷はな・・・」

俺は翼を広げる

エクセル「激戦よりは軽い！！」

実際は違う、左手首が動かない状態だ

エクセル『次の一発で引く。二人とも・・・力をかしてくれ』

スバル「――――――――――うん』

ティアナ「もう・・・勝手に決めないでよ』

二人が俺の後ろに回る

ミヤビ「潰すわ・・・飽きたし』

ミヤビが仕掛ける構えをとる

エクセル「俺はな、自分勝手だし・・・嘘つきだよ』

ブランド・ティータを逆手に持ち構える

エクセル「みんなに秘密を作り、大切な人にまで隠し通すほどに』

三人がエクセルを見る

エクセル「スバル、ティアナ・・・お前たちの魔力と気持ち、俺に預けてくれ』

その言葉と共に、二人の体が光に包まれる

ティアナ『なつ、なにこれ・・・さつきとは』

スバル『これ・・・なんだか心地いい』

エクセル「魔力憑依第3形態、ペルソナ...」

フュージョンと違い、これは2つの魔力を纏つもの

つまり、重ねと纏いを合わせ

二人を纏い資質、魔力量をさらに受け持つ。さらには負担がよりかかる

エクセル「ミヤビ・・・おまえは俺を怒らせた」

ミヤビ「怒らせると不味いのかしら」

光が収まる。そこには翼、目が片方ずつオレンジと水色の色をし、ブランド・ティータを逆手に構えていた。

エクセル「消えると知れ。魔力解放、ティアナとスバルの魔力、絆の証、シードブレイク！」

片腕に風圧が大きくなれる

ミヤビ「調子に乗るなーーー！」

ミヤビが襲い掛かる。だが――――

ミヤビ「なに・・・」

エクセルの体が霧のように焼き消えた

ミヤビ「幻影！？」

エクセル「ブレイド……」

ミヤビの真上にエクセルは翼を広げた状態で立っていた。

ミヤビ「な……」

エクセル「リボルバー……」

風圧をブランド・ティータに移転し、ミヤビに振り下ろす
強力な風圧がミヤビを貫き地面に叩きつける

ミヤビ「ば……かな」

元の姿に戻ったミヤビ

地面にめりこんだミヤビにエクセルはブランド・ティータを向ける

エクセル「ティバイン――――

ブランド・ティータの先端に水色の魔力が集中する
ミヤビには抵抗する力は残ってはいなかつた

チング「待て、エクセル」

チングがエクセルの隣に来る

エクセル「なんだチング、邪魔するな」

チング「ここに聞きたい」とある

ミヤビを警戒しながらチングは問う

チング「答えるミヤビ、ダーウィン姉さまの墓はどうだ

ミヤビ「ふ……そん……なことを……聞いて……」

チングはミヤビの右手にピートネイターを刺す。

ミヤビは小さな悲鳴を上げる

チング「もう一度だけ聞く、そもそもなぜ」

ミヤビ「あれは……あいつの骨はリューネの中に、リアクトのための媒体として、適合者へのリアクトプラグとして、マスターがそう指示を……」

エクセル「リアクト……？」

チング「適合者だと……それは誰だ」

ミヤビ「……アンタの息子だよ」

エクセル&チング「！？」

憑依が解けた。二人に加えてスバルとティアナも驚愕していた

ソラが……適合者だと

エクセル「ソラが適合者……？そのリアクトとはなんだ……！」

エクセルがミヤビの胸ぐらを掴む。ミヤビはほくそ笑む

ミヤビ「それは――――――」

ヒュウッ――

ドスッ――

突然、ミヤビの額に小さなクイグが撃ち込まれた

ミヤビ「マ・・・スター・・・・

頭が力なくぶら下がり、ミヤビは力尽きた。

エクセルたちは背後を振り返る

エクセル「貴様はツ――」

そこに浮いていたのは敵のボスにしてオメガを率いる者

エンペラー本人だ

エンペラー「それ以上、秘密を喋る愚か者は必要ない」

エクセル「エンペラー――！」

エンペラーに無数の刀剣を放つ。だが、それはエンペラーに達する直前で消えた

エンペラー「ふ、その程度なのか」

き、消えただと…？」

エクセル「おまえ…やはり、ただの人間じゃないな」

エンペラー「その通り…俺はもはや人間ではない」

ティアナ「じゃあ、あなた…一体なにもの!? ロストロギアで簡単に魔導師を洗脳できるわけないわ」

それがずっと疑問だつた。ひとつロストロギアで何万という人間を洗脳できるわけがない

できるとすれば俺やエドのよつた存在か、または

エクセル「あるとすれば…おまえは歴史の……」

エンペラー「そう簡単だ。私は貴様が言つて居る正当な歴史からやつてきたのだ」

三人「!？」

エクセル「正当な歴史からの漂流者…つまり俺が干渉しない歴史からきた者」

エンペラー「」名答…天使であるキリガの世に干渉したとき、ある場所で膨大な情報爆発が起きた。」

当時、私は科学者だつた
とあるウイルスとそれに関連する武器を研究していた
これは依頼でもあつた。管理局の特務課
依頼を受けた私はすぐさま研究を始めた。この研究でわかつたことが
がいくつかある

それはこのウイルスを元にロストロギアを組み合わせれば人の精神
を意のまま操れるのだと、だがこれは危険なことだ。ロストロギア
の研究し所持していた私にとつては、そのことを忘れるように武器
の研究を始めた

その翌日だつた、私の目の前で次元の穴が開いたのは
穴に落ちた私は情報の放流を一気に受けた。時代の流れや知識の渦、
ありとあらゆる情報が頭を駆け巡つた
苦しむ私の目の前に一つの光景が目に入つた
ある人物が友達を救うために世界を作り変えたと
その光景を目に焼き付けた私は、気づけば何も知らない場所で機材
と倒れていた

なんとそこは作り変えられた世界の未来だつた
行く当てもなく暗い夜をうろついていると、一人の少年に出会つた
その少年は、あの人物に似ていたのだ

エンペラー「その少年は未知の力を持っていた・・・時を越える力をな」

エクセル「まさか・・・」

エンペラー「そう、貴様の息子のソラだ。あいつの強力な力を得て、私はこの時代にやってきた」

そこで俺はソラの記憶障害の真実に気づいた。こいつの説明、よく思えば簡単じゃないか

エクセル「そうか..読めたぞ、お前の研究..そのウイルスを使ってソラを苦しませロストロギアを使い洗脳した。その結果、あいつの記憶が混乱した」

エンペラー「ふん、まさか・・・研究結果が役立つとは思わなかつたがな。だが、それだけではない・・・今の私は貴様の同胞の力ま

でも奪つた

エドの力だと…？なら、あの穴に吸い込まれるときこいつていた奴とはエンペラーだったのか
じゃあ、今このことは

その時、エンペラーが指を鳴らした

辺りからマコアージュがぞろぞろと出てきた

スバル「困まれた！？」

チング「回り込まれてたところ」とか…

ティアナ「エクセル！！」

エクセル「ソラの人生を狂わせたのは他ならないお前だというのならば」

俺はブランド・ティータを構えた

エンペラー「笑わせるな。それは私とて同じことだ…まあ、よい…もうすぐ私の計画も最終段階になる」

するとエンペラーが霧のように消えた

エクセル「待て…！」

飛ぼうとしたその瞬間

エクセル「ぐつー？ がは・・・つー！」

俺は膝をつき大きな吐血をした。気を失いかけるほどに

チング「エクセル！？」

エクセルによるチングたち。マリアージュがゆっくりと近づいてくる集団な上にウイングロードも使えない

ティアナ「覚悟を決めるしかないわね・・・」

スバル「せめて、イクスを救いたかったけど」

エクセル「な・・・にを言つんだ」一人とも・・・まだ戦えるだろ？

「さうとも、そして我らを呼んだか！！」

突然、教会の屋根から声が聞こえた

そこにはマテリアルたち3人がいた

ティアナ「ちよつ、なんで！？」

チング「なぜお前たちがここにいる！？」

雷刃「ふつ、ふつ、ふつ……弱き者がいる場所に僕らありーーー！」

星光「ピンチの時、お呼びとあらば直ぐ参上します」

闇王「我らが3人を者たちはこつ呼ぶーーー！」

3人「マテリアルズ！！」

ポーズを取つてなぜか背後でそれぞれの色にあつた爆発が起つて

エクセル「そ・・・んなことはいいから、援護・・・頼む」

スバルに支えられながら立ち上がる。

闇王「当然であろう！…」

3人がマリアージュへ仕掛けた。

星光「ストライクカノン、フルバースト！…」

雷刃「雷刃封殺爆滅剣！…」

闇王「ジャガーノート！…」

なんとか、転送して戻つてこれた

ティアナ「はやく医務室へ！！」

エクセルを抱えたスバル、走つて医務室へ直行する7人

「医務室」

駆け込んだ医務室にはザフィーラしかいなかつた

ザフィーラ「どうしたお前たち！！」

チング「エクセルが血を大量に吐いて倒れたのだ！！シャマル医務官はどこだ！！」

ベットへエクセルを寝かすスバル。

エクセル「大丈夫だ・・・スバル」

ティアナ「そんな途切れ途切れの声でよくそんな口がきけたわね。」

スバル「そうだよ、怪我もしてゐるのに

シャマルと通信を終えたザフィーラがこちらに寄つてきた

ザフィーラ「すぐにシャマルが来る。その間、少しだけ話してやつたらどうだ」

エクセル「元々、話すつもりだった・・・いいか、6人ともあまり騒ぎ立てるなよ。俺の体は・・・後1年も生きられないところまで来ているんだ」

苦し紛れみたく、彼女たちに俺の体のことを伝える

ティアナ「最低よ、エクセル・・・なんで平気な顔でフェイトさんと一緒にいられるのよ。あの人は婚約者でしょ！－！そんな体で生きていけるわけが…」

どなるティアナ、他の5人も同じ意見だらつ
だが今はそれどころではない

エクセル「彼女に婚約を告げる前から予兆が見え隠れしていたが、戻つてから自分で確かめてみたらこの様だ・・・またみんなはちゃんと話す。今はフェイトにソラのことを最優先に伝えてくれ」

一方、その頃

帰還を知らないフェイトはフラフラと歩くソラを見ていた

あんな状態でどこへ……この先は確か、転送ポート

フェイト「ソラ、こんな形で……ごめんね」

そこへ、ティアナから通信が入った

フェイト「ソラとエンペラーに繋がりが！？」

ソラに関してだけ知らせを受けたフェイトはソラの後を追いついて、転送ポートの近くではバリアジャケットを装着したソラが転送される直前だった

ソラ「行かなくては……」

フェイト「ソラ……！」

フェイトは転送を急停止させる

ソラ「母さん……なんで

フェイト「今、連絡が入ったの……ソラ、あなたがエンペラーと繋がりがあるって……」

パキッとソラの頭の中で何かが切り替わった。

ソラ「誰からですか……その情報？」

フェイト「Hクセルから

ドクンッ！－

ソラ「そりなんですか・・・それで俺を捕まえにきたと」

フロイト「ううん、違う。あなたに行つてほしくないから、ドゥー
Hと一緒にほしくないから」

ドクンッ！－

その言葉が引き金となつた

ソラ「ふ、ふふふふふふッ・・・そりなんだ、母さんまで」

フロイト「ソラ・・・？」

私が近寄ると

ソラ「例え母さんでも、それは許せない」

突然、ソラがフロイトの首を両手で締め付けた

フロイト「ぐひーーー、うひうひうひーーー！」

いきなりの行動でフロイトは何もできなかつた。

ソラ「母さんだけは味方だと想つていた。だけど、違つたんだ…結局はあいつの味方」

ソラはさらに締め付ける

息ができなくなつていいくフェイト。そして咄嗟に魔力がこもつた拳でソラの顔を殴った

殴つたところが悪かつた・・・ソラの右目だつた手を離したソラからフェイトはすぐ様距離を取る

フェイト「げほつ、げほつ・・・！」

ソラ「これが・・・息子に対する答えですか・・・」

息が整わないフェイト。ソラはニルヴァーナをフェイトへ向ける

ソラ「なら、死んでください」

！？・・・な・・・に・・・体が・・・動かない！？

ソラ「せめてもの情けです。安らかに眠つてください」

フライト「!?!?」

ニルヴァーナを上へ向けたソラはこう呟いた

ソラ「ディバイドゼロ・エクリプス・・・！！」

第5話 片翼の眞実（前書き）

ドサッ

フェイトは力なく床に倒れる

傷ついて、というのではなく「結合分断」による心停止だ

本来は広域な技なのだが、ソラはそれを小規模に留めた

ソラ「さよなら・・・大事な母さん」

転送の光に包まれたソラ。行き先はミッドチルダ
エンペラーの元へ戻るために・・・

第5話 片翼の眞実

3分後

転送ポートの異変に気づいたのはエリオとキャロ達だった

キャロ「フロイトさん!？」

倒れていたフロイトを見つけ、エリオは医療班を通信で呼ぶ。

キャロ「フロイトさん!…フロイトさん!…」

『AED作動』

バシュツ!

ジャケットのAEDが作動する

フロイト「…………げほつ、げほつ!…」

息を吹き返したフロイトはひどく咳き込む
荒い息をしながら立ち上がる

キャロ「フロイトさん、無茶は!…」

フロイト「大丈夫、歩けるよ」

額の汗を拭い、自分の手を見る

少しだけ震えていた

フュイト「私は……」

二人は互いに背を向けていた

エクセル「……」

フュイト「……」

一つの部屋でお互い背を向けた状態で悲しい表情をしていた

エクセル「隠して置いてすまなかつた」

あの後、みんなに……体の状態を伝えた

殴られもした。怒られもした

ただ、俺たちはそんなあまい状態ではなかつた

ソラを…失つた

大切な息子を失つてしまつた

フェイト「エクセル…ソラは、ソラは本当にエンペラーとの繫がりがあつたのかな？」

エクセル「さあな、俺にもわからない…けど、そんなことはもうどうでもいい」

エクセルの発言にフェイトが振り返つた。

フェイト「そんなこと…大切な子どもに對してエクセルからしたらそんなこと扱いなの…」

エクセル「…違うんだフェイト…問題はそこじゃないんだ」

あの後、俺は改めて後悔した

エンペラーは正当な歴史の住人、あいつがこっちの世界にいるのは俺の所為だ

改めて言つなら…・・・

エクセル「この戦争ともいうべき状態を招いたのは他ならない俺だ。エンペラーの人生を狂わせたのは俺なんだ…もう俺には世界を変えられることも運命を変えられることも出来ないんだ」

俺は泣いていた。悲しんでいた、責任を感じていた
あいつの前ではいきがつてたが、フェイトの前ではこうだ

俺は泣いていた。悲しんでいた、責任を感じていた

フェイト「エクセル…」

エクセル「こちらへ帰還するとき、代償として天使の力のほとんどを捧げた。今できるのは武器の創生と君たちを束ねる憑依だけ…奴は、エンペラーはエドの力を全て受け継ぎ、今の俺より強い…こんな状態で一体、どうやって奴に勝てばいい…！」

正直情けない…計画を立てればくつがえされ
大切な物には裏切られる…なにが父親だ、なにが天使だ
正直、バカらしくなつてくる

エクセル「ソラのことだつてそうだ…あいつが重要だ…」
とはわかつてた。未来でのあいつが孤独に近い状態だ…
それも俺の責任に違いない。それにソラを怒らせてしまつたのも俺
自身だ…教えてくれ、フェイト…俺は…どうすれば
いいだ…」

震えながら膝を抱えるエクセル。もはや彼の面影がないに等しいく
らいに責任を抱えている

ううん、違う…この人は遠い昔から私たちを救うために戦つてきた
んだ…

そんな彼が…今や自分の行いに責任を感じ始めている
なら、今の私にできるのは彼を支えること

そんな私も彼と同じように隠し事をしている…天使の…彼の力を封
じ込めたロザリオを隠し持つていて。今の彼にこれを渡せば間違い
なく彼の体は限界を越えてしまう

そんな私でも彼は知らずに抱きしめてくれていた

フェイト「……戦おう、エクセル」

私は、エクセルを背中からそつと抱きしめる

「私とエクセルでソラを助けよつ・・・親なりどるのも悪いことをして連れ帰るのも当たり前だよ。」

エクセル「だけど――」

フエイト「逃げるの？現実から目を背けてたら、私も含めて…みんなが死ぬかもしれないんだよ？」

エクセル「！？」

「フエイト」「もうやり直しができないなら、精一杯生きよう。例え少ない命でも最後の最後まで立ち向かえればいいんだよ・・・エクセル、今あなたは私が包んであげるから」

—本拠地—

エンペラー「よく、戻ったなタイプ。・・・いや、ソラ

ソラ「そつ仕向けたのは、他ならぬ貴様である。」

エンペラー「これはこれは手厳しい・・・なら、わかっているな。

ソラ「当たり前だ。そつと俺の最終調整をしひ・・・リアクトも出来ないこの体は何かと不便だ・・・つるさこのが来る前に速くしな」

メビウス「よろしいですか、マスター？ あの二人をリアクトさせ、もしも暴走でもしたら

酒を飲んでいたエンペラーは、もう一つのグラスに酒を注ぎメビウスに渡す

グビ・・・グビ・・・

エンペラー「メビウス、なぜ私があのウイルスをマリアージュやお前たちに組み込んだかわかるか?」

メビウス「それは私たちを暴走させないためでの処置だと」
エンペラー「それもある・・・別の理由はあいつが暴走したとき味方を識別するためだ」

エンペラーはメビウスにある書類を見せる

メビウス「マスター、」この書類で納得するのは正直なところ――

エンペラー「わかっている。私が証明しようではないか」

生命ポッドに入っていたソラ。エンペラーがパッドで最終チェックを行っている

リューネ「マスター・・・」

メビウス「他の子たちのチェックは済んだかい?」

リューネ「はい、全員がティバイダーを装備できる状態です」

エンペラー「ソラよ、私の声が聞こえるか？」

生命ポッドから出てきたソラへエンペラーが話しかける

ソラ「ああ、聞こえているよエンペラー……」

ニヤリと笑うエンペラー。ソラへニルヴァーナを手渡す

ソラ『最終ロック、解放』

ピシッ

ニルヴァーナに亀裂が入り、外装が割れる

一つは大きく形を変え、黒を基本色とし赤の線が入りリボルバー式拳銃の銃身下に片刃のワイヤーカッター付サバイバルナイフを融合させた形状となる。もう片方は刃が肥大化し大剣に近い状態となる

ソラ「やはりいい武器だ。確かティバイダーと呼んだか」

リューネがソラへ近づき、腕輪を渡す

リューネ「これで誓約は完了になるわ」

自分の左腕にも同じ腕輪がつけられていた

エンペラー「ふつ、では次のステージに行こうではないか」

その時、部屋のアラームが鳴り響く

メビウス マスター、敵船6隻がミッド上空に侵入しました

エンペラー「おやおや、いいタイミングだ。全部隊に出撃命令を出せーー！」

—ヴォルフラム ブリッジー

シャーリー「全艦、戦闘準備完了しました」

クロノ「うむ、では始めよ」

格納庫にいた六課の戦闘メンバーは各自の装備を確認していた

アギト「いいかシグナム？まだお前の武器は完成していないんだ。無理に突っ込むなよ？」

シグナム「わかっている。レヴァンティンがある限りは戦う

壁の近くではストライクカノンとフォートレスを装着するなのはこの通り
ユリカが色々と説明する

ユリカ「シールドに武装つけたけど、これでいいの？」

「3つの多目的シールドに「砲戦用の大型粒子砲」「中距離戦用プラズマ砲」「近接戦用实体剣」

普通の装備じゃあ意味がない。今度からはいついた武装が必要になつてくる

なのは「ありがと。これで少しはマシになるよ」

ユリカ「マシって？」

なのは「フヨイトちゃんやエクセルくんがあんな状態で、おまけにソラくんが『結合分断』を使えるんじゃこの位の武装がないと……」

「

ため息をついて、右腕を見る

付いたシールドの剣を出現させ、それを眺める

ユリカ「なんか無理してない？」

なのは「……最近、腕が痺れはじめちゃって。エクセルくんが治してくれる前の状態に戻ってきてるの」

ユリカ「ああ……今は聞かなかつたことにするよ」

ユリカが別の所へ走つていく

はやて「平氣か・・・？」

エクセル「大丈夫だ。問題は一切ない」

〇〇（ダブルオー）の調整を行つていたエクセルにはやては話しかけていた。

はやて「エクセルくんは命令あるまで待機や。クロノ提督には話は通してある」

エクセル「すまないな・・・」

ビービー！！

シャーリー 敵に動きあり！ライオット、アグレッサーは準備をお願いします！！

艦内放送が流れ、全員の動きが忙しくなる

エクセルは〇〇（ダブルオー）を装着し待機する

戦闘開始のコングは鳴った

マリアージュと洗脳された魔導師隊が大隊でのお出迎えだ

なのは「主砲のメンバーは合図と同時に斉射、後に私を先頭に空戦隊は出撃します！！」

なのはの後ろにいたのは、ヴィータとなのは率いる教導隊メンバーと空戦魔導師隊3部隊

各々がストライクカノンとウォーハンマーを装備し、フォートレスを装備している人物はなのはだけ

敵が分かれた。それをなのはは見逃さなかつた

なのは「発射！」

その場が轟音で支配された。多くのHネルギー砲が敵の軍団に穴を開け、なのは達が突撃していく

「フュイト」¹、地上部隊と共に出撃する

はやて『了解や、気を付けて』

ヴォルフラムの甲板でマテリアルたちといったはやて

はやて「いいかロード、船に近づくマニアージュは容赦なく撃ち落とすんや」

闇王「わかつておる小鳥、シユテルとレヴィもよいな？」

雷刃「うん王様！！近づく奴は撃ち落とすんだよね？」

星光「違いますよレヴィ、敵だけです」

「フュイト」にちりりライオット、こちらも地上部隊を突破・・・オメ

爆発がいたる所で起き、いたるところで人が落ちていく
マリアージュが爆発し魔導師が落ちるか殺されるかだった

なのは「レイジングハート、ブラスター・ビットを射撃モードに!」

『レイジングハート』了解

なのは「でえ――い――」

実体剣でマリアージュを斬り、ビットとシールドで射撃と砲撃を繰り返す

なのは「こちらアグレッサー、敵の集団を突破!」

ガの姿が確認できない」

空と地上ではオメガたちの姿は確認できないでいた。
こんな簡単に突破なんて……

フェイド「――――誘い出されてる? だとしたら……・・・・・ツ! ?
マズイ! !」

遙か上空、ソラとオメガたちはそこについた

ソラはニルヴァーナを下に向けた。

ソラ「ディバайд・ゼロ・エクリプス! !」

超広域空間魔法

本来はそんなに範囲は広くない。だが、ソラの力は予想以上の能力
を發揮する
それが範囲をこんなまで広くする

空と地上の部隊を簡単に包み込むほどだつた

「なのはーッ！？」「

ヴィータ「こいつはツ・・・ー！」

人により分断効果を行動不能にまですることができる。だがそれも一部の事

部隊のほとんどが心停止状態に陥っていた。

船の中までも

エクセル「くづ…・体が重い」

「！
シャマル、心停止してる子もいるわ！！AEDを強制作動させて！」
シャマルたち医療班が慌てながら倒れている局員たちをみて、廊下に出る00（ダブルオー）を量子化し、廊下に出る

あそこに倒れているのは・・・ユリカか？

エクセル「シャマル・・・ユリカは？」

シャル「この子が一番ひどい状態よ。局員の制服じゃないからAEDがない分、早くなんとかしなきゃ——」

はやて「ローデ、ビーからや……」

クロイツで体を支えながら闇王たちを見る

闇王「バカが……上からに決まっておらうが……」

ふらふらの雷刃を支えながら、彼女は怒っていた

星光「ローデ、中へ……外は危険です」

地上では何人かが既に立ち上がる者もいた

フュイト「ティアナ、こっちの指揮は……任せたよ」

ティアナ「はい……フュイトさんも、お飯をつけて」

フュイトは空へ飛んでいく

フュイト「あつと……すぐ仕掛けてくれるさあ」

マキオ「いくぜオラッ————！」

戦斧を持ったマキオが魔導師へ襲い掛かっていく

デバイスを叩き折り、魔導師を粉碎していく
持っている武器はそれぞれソラと同じ種類の武器だ
なのは「させない！！」

マキオとなのはが戦闘を開始する

地上ではスバルたちがイザナミたちと戦闘を開始する

スバル「イクスはどこだ！？」

イザナギ「答えるつもりはない・・・」

背中に黒い翼を生やし、ペアで戦う一人

ティアナ「スバル、こいつら互いの能力で補つて戦ってるーーー
らの隙を見つけるのよーーー！」

リューネ「それから行きましょうか、ソラ」

ソラ「ああ・・・」

そこへ、金色のハーケンが飛んでくる

リューネ「！？」

ソラ「・・・」

キンッ！

ニルヴァーナでハーケンを斬り、リューネを守るソラ

フェイト「ソラ・・・！？」

飛んでくるフェイト

リューネ「あの女・・・」

フェイントはバルデッショを構え、距離を置く

ソラ「・・・リューネ、やるぞ」

リューネ「了解・・・！」

リューネがソラが付けていた腕輪に手を触れた

フェイント「なにを・・・」

そこへ

エクセル「フェイント・・・！」

エクセルが〇〇（ダブルオー）で飛来する

リューネ「あら、いいタイミング・・・」

エクセル「リューネ、ソラから離れる！！」

リューネは口元で笑う

リューネ「面白いものを見せてあげる・・・正当な歴史から取り寄せた恐ろしい力を」

ニルヴァーナ／ディバイダー 996『React』

二人の腕輪が煌く。この輝きに似たものを一人は知っていた
ユニゾン・・・それと同じだった

ソラの背中に白銀の翼と漆黒の翼が現れる。片翼が両翼になつた

両目が紅くなり、短髪が銀色に、バリアジャケットが黒くなつていぐ
攻撃性をみせるバリアジャケット、上半身の肌が露出し一部に赤黒
い文様が入る

それはまるで「黒騎士」のようだ

ソラ「せつかく時空を超えて来たんだ：親子対決といいつぜえ、親
父——ツ——！」

ソラの目の前に夜天の書に似た本が出現する

リューネ『黒天の書、起動』

本が薄く光がともる

フェイト「ソラ……」

言葉を失っていた

エクセルは〇〇（ダブルオー）を量子化し、ブランド・ティータを
構える

エクセル「フェイト……纏うぞ、『重ね』るんだ」

フェイトはエクセルの後ろに立ち、魔力を開放しエクセルに重ね身
をゆだねる

体が魔力の色に染まり、雷が宿ったブランド・ティータを構える

フェイトの魔力“雷帝の剣”

エクセル「お前が打っていたアンプルの中身はウイルスだった。違うか？」

ソラ「そうだよ、親父！！今頃気づいたか！！」

彼の性格がまるっきり正反対と化していた

エクセル「なら、お前を助けてやる・・・行くぞ、フェイト！！」

フェイト『うん！！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5010z/>

魔法戦記リリカルなのは the LAST BATTLE

2011年12月20日16時50分発行